魔法少女に襲われています

ガラン・ドゥ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

岸波明日葉は前世の記憶を持った人間だ。

それ以外は平穏を好み、日常に充実感を感じている普通の女の子である。

しかし、ある日見たこともない黄金の果実を手にしてしまったことでそれまでの生活が一変する。

魔法使いというものに出会い、今まででは考えられない生活を送ることになったが、まさか彼女達から色んな意味で襲われることになるとは……

「これからどうなっちゃうの？　ボク」

目次

01：魔法少女に襲われています ―― 1
02：反転した日常 ―― 9
03：魔法少女現る ―― 19
04：帰ってきた平穏 ―― 32
05：絡みつく不穏 ―― 45
06：親友!? ―― 57
07：次の一歩 ―― 70
08：新たな魔法少女 ―― 81
09：人生ままならない ―― 97
10：罠か、それとも ―― 110

０１：魔法少女に襲われています

新たな生を受けて１５年とちょっと。
最初は戸惑いこそしたものの、今はそれも受け入れて人生を謳歌している最中だ。
勉強、運動、容姿と学生としてのステータスは全て平均以上なのではないかと自分では思ってる。
前世では奥手な方だったから、それを改善しようと努力した結果が今になって活きてきた。
人って頑張れば変われるんだな、と若干感動していたがそれを前世で分かっていれば……。
でも過ぎたことをくよくよ考えてもしょうがない。
今やりたいこと、今しかできないことを精一杯こなす方が楽しいに決まってる。
とはいえ人生そこそこが良いかな。
頑張り過ぎて自分に分不相応なことをしても疲れるだけだし、何より目立つのは得意ではない。
自分のペースで、自分に合ったことをやっていきたいのだ。
親しい友人を作って、嫌だなと思いつつも学校に行って、そんくらい普通の学生として生きていきたい。
前世の記憶を使って画期的な発明したり英雄になったりする？
そういうのは最近流行りの小説にでも任せて於けばいい。
平凡で平和な生活ができればそれでいいじゃないか。
変わらない日常。変わらない風景。
ずっとこのままだったら良いのになあ。
……そう、思っていたのに。
「――安心して明日葉ちゃん。何も怖いことないからね！」
「そんな血走った目で迫られて怖くないは無理があるでしょ！」
「大丈夫！　こう見えてわたし、ハジメテの人には優しくする自信があるから」
「それでボクは何を安心すれば良いの!?」

「明日葉ちゃんが天井の染み数えてる間に終わらせるから大丈夫！」
「それ女の子が言っちゃいけないやつー!!」
どうしてこんなことに？

□

カーテンの隙間から光が差し込み、まぶしさに反射的に顔を背ける。
徐々に意識が覚醒していき、ゆっくりと瞼を開けた。
冬が過ぎ去ったばかりのこの季節、なかなかベッドの上から出たくはないが、気合で毛布を払い床に足を落とす。
東側についた窓の傍まで歩くと、そこから見えるのは雲ひとつない晴れ晴れとした空であった。
ロックを外して開けてあげればまだまだ冷たい風が部屋へ差し込んでくる。
それを身に受けグッと背筋を伸ばすと。
「ふわぁあ……」
思わず口からあくびが出てしまい、咄嗟に手で覆う。
こんな時間に誰かに見られるということもないだろうけど、淑女たるもの上品な振る舞いを常に意識しなければならない。
爽やかな外気を十分に浴びてから窓を閉めると、着替えに取り掛かる。
白いブラウスに赤いスカーフ、薄茶色のプリーツスカート。
まあ割とどこにでもありふれている女子高生の姿だろう。
おかしなところがないか姿見の前に立ってくるりと回ってみた。
そんなことをしていたら下の階からボクを呼ぶ声がする。
「明日葉（あすは）ー。ご飯できてるわよー」
「はーい、今行くよー」
ボクは部屋を出る前に再度鏡を見た。
邪気のないまん丸い目。
短すぎない程度に切った髪はショートボブに。

試しに笑顔を作ってみるといかにも快活そうに見える。
これがボク。
今のボク――岸波明日葉（きしなみあすは）の姿だ。
ボクには前世の記憶らしきものがある。
一般的な家庭に生まれ、早くに両親を亡くし、周囲と打ち解けられずにボッチ街道をまっしぐらに突き進んで、結婚どころか成人しても恋人すら作れずに死んだ、という男の記憶が。
我ながら何ともつまらない人生だった。
めちゃくちゃ無理をして明るく振る舞っていたら少しは変わったのかもしれないが、それも後の祭りだろう。
閑話休題
死ぬ間際に段々と意識が遠のいていくとこまでは覚えているのだが、次の瞬間にはすでに赤ん坊として今世の両親の腕の中にいた。
最初の内はおぼろげに前世のことを覚えている程度であったが、成長するにつれてハッキリと思い出していき、最終的には前世でやったことの全ての出来事がボクの中にインプットされている。
目覚めた当初は夢なのかなとも思った。死に際に意識をなくして、自分が自分でなくなる前に見ている最後の夢だと。
しかし、夢にしてはずいぶんと体が自由に動くし、何年経っても夢から覚めることがなかったからこれが現実の出来事であると認めざるを得なかった。
もしかしたら二十代で死ぬことになったボクに対して、神様がもう一度くれたチャンスなのかもしれない、そう考えるようになってからはまあ気楽なもので、折角の二度目の人生だし楽しもうと思うようになった。
ただ前と違うのは自分が『女』として生まれたこと。
このせいで幼少期はなかなかに大変であった。
髪は伸ばさないといけないし、着るものは当然スカート。更には同性の幼児と遊ばなければいけなかった。
おままごととか、ごっこ遊びとか、人形遊びとかとかとか。
成人男性の精神を持っているボクがそんなことをしていたなんて、

客観的に見ると正気の沙汰ではない。
だが耐えた。
男子の友人には恵まれなかったし、ここを耐えねばまたボッチになりかねなかったからだ。
おかげで親友と呼べる友達もできたし、女の子の所作に慣れることができたのだから結果オーライと言えるかもしれない。
おかげで岸波明日葉は１５歳の女子高生として学校に溶け込めている。
前世の記憶を持っていることもあって、勉強をあまりせずとも授業に遅れることはない。
その分他のことに時間を使えるのだからお得なのだろう。
おしゃれに無頓着なのも不味いのでそのことに時間を使ったり、今年からはバイトも始めたいなあと漠然と考えてはいる。
仕事の経験はあるし働くには一応問題ない筈。
さて、そろそろ1階に降りねばお母さんに怒られてしまう。
ボクは姿見の前を離れて自室のドアを出る。
トントンと軽快に階段を下っていくと、香ばしい匂いがボクを出迎えてくれた。
居間には見慣れた2人の姿がある。
「おはようお母さん、お父さん」
「うむ、おはよう明日葉」
「はいおはよう。顔を洗ってきなさい」
「はーい」
言われるままに洗面所に向かい、洗顔してバッチリ決めてから居間に戻る。
ボクが席に着くと3人で「いただきます」と挨拶をし、朝食に手を付けた。
今日は焼き魚にライス、そしてみそ汁という見事なまでの和食。
やっぱり朝はこうでなくっちゃ。
焼き鮭に箸でほぐして口に運びながらテレビを見た。
ここからそう離れていない場所の映像が映し出されていて、リポー

ターが何やら焦りを滲ませながら現場の様子を伝えている。
「道路の中央に大きな穴だってさ。陥没でもしたのかな」
道路のコンクリート部分に大きさ1メートル程度の穴が開いていた。ちょっとさそっとの衝撃じゃこうはならないだろう。
「新手のテロか？」なんてテロップも流れている。
「怖いわねえ。ここの近くじゃない。最近は何が起きるかも分からないし、もっと用心してた方が良いのかしら」
「確かにな。明日葉も怪しい人影を見かけたら絶対に近付いちゃ駄目だぞ。知らない人についていくのは以ての外だ」
「いやいや、ボクももう高校生だよ？　そんなことするわけないじゃん」
「そういう油断が危ないんだ。自分は大丈夫だと思っているといつのまにか事件や事故に巻き込まれる」
「うーん。ボクは気を付けてる方だと思うけどなあ」
モグモグとご飯に手を付けながらお父さんの方を見た。
お父さんはいたって真剣な目でボクに視線を合わせている。
「そうやって何かあってからじゃ遅いんだ。大体明日葉はいつも――」
「もう、お父さんったら。そんなにくどくど言わなくても明日葉は分かってますよ。あまりしつこすぎると『パパ嫌い』なんて言われるかもしれませんよ」
「え”……そ、そんなことないよな、明日葉？」
「……」
お母さんに乗っかってわざと無言でニッコリと笑みだけ浮かべる。
そしたらお父さんの顔がみるみる青ざめていった。
「う、嘘だ……。嘘だと言ってくれあすはー！」
「そんなに騒いだら近所迷惑よ、お父さん」
「無情！　無情すぎるぞ母さんや！」
岸波家でのいつもの掛け合いに自然と笑みがこぼれる。
こうやって夫婦漫才を繰り広げるくらいだから、まだ熱々なんだろうね。前世で恋人がいなかったボクからすれば羨ましい限りだ。

でもまあ、こういう仲の良い両親がいてくれるだけでもボクは心から嬉しく思う。
もっと目の前の光景を見ていたいけど、そろそろ時間がやばい。
「ごちそうさまー。ボク学校行ってくるね」
「あら、もうそんな時間かしら。行ってらっしゃい明日葉。気を付けていくのよ」
「はーい」
「ま、待つんだ明日葉。まだ話は……」
「ほらほら。お父さんも会社に行く準備しないと遅れるわよ」
「2人とも最近、父さんに冷たくないか……？」
首をガックリ落としているお父さんを尻目に歯磨きと髪型のセットを終えて、ボクは自室に鞄を取りに行くと玄関を出た。
歩いて10分程すると、一軒の家が見えてくる。
その家のインターホンを押すと、すぐに「はーい」という返事がマイクから届いた。
1分も待たずに玄関が開く。目の前の女性はボクを見るとニッコリ笑い掛けてくる。
「あら明日葉ちゃん、おはよう」
「おはようございます。芹（せり）は？」
「ちょっと待ってね。せりー！　明日葉ちゃん来たわよー」
女性が家の中に呼びかけると、「今行きまーす」と返ってきた。
談笑しながら待つこともう1分。
中から制服を着た女の子が出てくる。
「お待たせ、明日葉ちゃん！」
「芹、寝ぐせ付いてるよ」
女の子の髪を指差すと、慌てて押さえた。
「うわわ、ほんとだ。　ちょ、ちょっと待ってー！」
彼女はすぐに引き返して廊下の奥の横部屋に入ると、ドライヤーの音が聞こえてくる。
「全くあの娘ったら。ごめんなさいね明日葉ちゃん」
「いえいえ、ボクは気にしてませんよ」

「明日葉ちゃんは本当にしっかりしてるわねえ。うちのももっと大人になってくれたらいいのに」
「あはは……」
本当は中身大人なんです、なんてことは口が裂けても言えない。
今寝ぐせを直している女の子の名前は初霜芹（はつしもせり）。
幼少期からずっと一緒にいた、いわゆる幼馴染というやつだ。
幼稚園も一緒、小中も一緒とそれはもう付き合いが長い。
これで高校までずっと同じクラスだというのだからなんだか特別な縁を感じてしまう。
芹の方がとびっきり美人ではあるからボクの方が霞んでしまうけど。
肩まで掛かった髪をサイドテールにし、顔は可愛い系で笑顔を浮かべるとふんわりとした印象を抱く。
……ちょっと抜けてるところが玉に瑕かな。
とはいえそういったところが魅力的に感じる男子も多いことだろう。これで彼氏がいないのだから不思議なものである。
ちょっとすると芹が洗面所から出てくる。今度はバッチリなようだ。
「お、おまたせ～。ごめんね明日葉ちゃん……」
「大丈夫。時間にはまだ余裕があるから。それじゃあ行ってきます」
「行ってくるね、お母さん」
「はい、二人ともいってらっしゃい」
せりの母親に挨拶をして、初霜家を後にする。
学校まではここから２０分程。ゆっくり雑談をしながら歩く。
なのだが隣の芹はいつもよりポワポワしているようにボクの目には映った。
「芹、なんか眠そうじゃない？」
「え。そ、そうかな？　あすはちゃんの気のせいだと思うよ……！」
ギョッと目を見開いてしどろもどろになっている。
こういう時の彼女は大体なんか隠しているのをボクは知っていた。
「芹って嘘つく時分かりやすいよね～」

「うぐっ」
「あれでしょ、深夜ドラマとか見てたんじゃないの？」
「ふぇ？　……う、うん。そうなんだよね。ついハマっちゃって！」
「ふーん。誰かカッコいい俳優でもいた？」
「そんなんじゃないから！　わたしは明日葉ちゃん一筋だよ！」
「うんうん、そうだね～」
「う～明日葉ちゃんが冷たい……」
「あは、ごめんごめん」
芹も冗談言えるんだなー、と心の中で考えつつ笑う。
こういうなんでもないような会話が心地いい。生まれ変われてホント良かったなあなんて思ってしまう。
ボッチだった頃には考えられないことだ。
しかし15年間女として生きてきたが、未だに振る舞いはこれで良いのかと考えてしまう。
女の子の会話もこれで合ってるのかは分からないが、不審がられたこともないし問題ないのだろう。
メイビー、多分、きっと。
そんなこんなで他愛のない話をしていると、坂道のてっぺんに学校が見え始めた。
ここでボクは普通の学生と同じように、普通に授業を受けることとなる。
それが当たり前のことだと思ってた。

□

でも、考えておくべきだったのかもしれない。
ボクが何故『男』だった時の記憶を持ったまま生まれ変わったのか。
ボクは普通ではなかった。
これから、ボクは『彼女達』をどういった目で見れば良いのだろう。
岸波明日葉の普通ではない日常が、今始まる。

０２：反転した日常

授業は滞りなく進み、空はすっかり茜色に染まっている。
帰りのホームルームも終わり、ボクは芹と一緒に帰りの身支度を整えていた。
夕暮れ時の廊下を同じ歩調で歩く。
「――それでね、ボクの家の手前で猫が仰向けになって日向ぼっこしてて、すっごく癒されたんだよね～」
「へーわたしも見たかったなー。明日葉ちゃんもスマホで写真送ってくれれば良いのにー」
「ごめんごめん。グデグデになった猫の衝撃が強くてすっかり忘れてたよ」
「うわー絶対かわいいやつだよぉ。良いな良いな～」
ここにいない猫を想像しながら２人でふにゃりと笑う。
周りに人がいなくて良かった。
ニヤニヤしてるボク達のことを見られたら、絶対不審がられる。
まあ、この学校の９割の生徒が部活に所属してるので、残っている人間はそうそう見かけないから多分大丈夫だろう。
窓から外を見やると、さわやかなイケメンがサッカーボールをゴールに決めていたり、筋骨隆々のマッチョメンがラグビーに勤しんでいたりしている。
「いやあ、青春だねえ」
「え？……あ、部活の話ね。明日葉ちゃん高校でも部活に入るの？」
「うーん、どうだろ。バスケは中学校でもやってたしそれでも良いんだけど、バイトもやってみたいなって」
中学校の時は決して強いチームではなかったけど、メンバー全員仲が良かったし楽しく過ごせていた。
先にバスケ部に行ってる友達からも同じ部活にって誘われたりしている。
でも今からバイトでお金を貯めておきたいという気持ちもあるので非常に悩む。

「前にも言ってたよね。どんなことやりたいの？」
「うーん、そうだなあ。無難なところでコンビニバイトとか……あとはファミレスなんて良いかもね」
「ウェイトレス姿の明日葉ちゃんかあ。すごく可愛いんだろうなあ」
「ボクよりも芹の方が似合いそうだけどね」
「明日葉ちゃんにいらっしゃいませご主人様って言われたりぃ……。えへへ～」
「おーい、せりー？」
　芹の意識が上空にぶっ飛んでいってしまっている。
「せり、帰ってきてー」
「ハッ！　ごめんね明日葉ちゃん。つい……」
　１０年以上芹と友達をしているが、たまに彼女のことが分からなくなる時がある。
　やたらボクのこと持ち上げたり、自分よりもボクの服装選びに力入れたり。
　その時の芹はいつも目がマジな雰囲気で断れない雰囲気になってしまい、ボクはただされるがままだ。
　顔面偏差値８０を優に超えてる彼女に顔が良いと言われてもただただ疑問しか出てこないのだが、特に嫌味っぽく聞こえないのだからその性格を良く表している。
「芹は部活とか入ったりしないの？」
「え、わたし？　……ちょっと時間なくて無理かな～」
「中学生の時からたまに授業抜けてたりするよね。なんか忙しかったりするの？」
「あー、うーん。……内緒、かな」
　芹は困ったような笑みを浮かべつつ人差し指を口元に当てた。
　それがあまりにも似合ってて、これが男だったらイチコロだろう。
「へー。ボクにも話せないことなんだ？」
「うん。ちょっと今はまだ無理なの」
「今はって？」
「……全部終わったら話すよ。明日葉ちゃんは何も心配いらないか

ら」
なんだか芹の目が憂いを帯びていて、それ以上聞くことはできなかった。
玄関で靴を履き替えながら話を変えることに。
「そういえばさ、駅前に美味しいスイーツ店できたんだって。ちょっと行ってみない？」
「え、スイーツ!?」
さっきの困り顔が一気に明るくなった。
この娘甘党なので、スイーツと言えばどこにでも釣られてしまうのだ。その癖体重もあまり変わらないので周りの女の子から羨ましい目で見られている。
……もちろんボクもその1人。
「なんかねー山のように大きいパフェが話題になってるっぽいよ。ほらこれ」
ボクはスマホの画面を芹に見せた。
そこには広い口の専用グラスから飛び出た具材達が、これでもかと主張している写真が映し出されている。
すると彼女の瞳が一段と輝きを増した。
「わっ、すごーい！　絶対美味しいよ～。でもこれ注文したらお夕飯食べられなくなっちゃいそうだね」
「そこは2人で分けて食べれば良いんじゃない？　ボクも興味あるし、芹が良かったらだけど」
「え」
ボクの言葉に芹が目を見開いた。
「そ、そんな恋人同士がしちゃいそうなこと、良いの!?」
「う、うん、まあ。ボク達女だし別に問題ないんじゃないかな……？シェアする人達も結構いそうだしさ」
「うぅ～違うよ～。いや違わないんだけどぉ……」
芹は腕を伸ばして見えない何か探すような動きでモダモダしている。
「えっと、ボクとじゃ嫌かな……？」

「え、い、嫌じゃないです……。むしろ一歩前進というか……」
後半が聞き取れなかったが、拒否されてるわけではなさそうなので了承と受け取ることにした。
「良かった。早速出発しよっか」
「明日葉ちゃんとパフェ……。えへへ。じゃあ――」
「……うん？　芹？」
芹は会話を途中で止め、ピタリと動きを止めてしまった。
何事かと思わず振り返る。
彼女はというと、真剣な目でボクとは違う方向に顔を向けていた。
それからボクに向き直る。
「あの、ごめんね明日葉（あすは）ちゃん。用事あったの思い出しちゃって……！　今日行けなかったんだった……」
「あら、そうなんだ。じゃあここでお別れかな？」
「う、うん。ホントにごめんね。今日じゃなくても絶対行こうね！」
「分かった。いつにする？」
「うんと、そしたら今週の日曜日にしよ。その日は絶対に空けるから！」
今日は月曜日なのでちょうど一週間後くらいか。
その日なら予定も入れてないし問題ない。
「分かった。日曜日だね。芹の方で予定が入っても大丈夫だからあんまり無理しないでね」
「そんなことしないよ！　全部終わらせてから行くから待っててね。それじゃあ待たね」
「うん、バイバイ」
よほど急いでいるのか、芹の姿があっという間に消えてしまった。
芹がいないことで予定がなくなったボクはちょっと遠回りしてから帰宅することに。
馴染みの商店街の手前で鼻歌を歌いながら歩いていると、下から気配を感じた。
見下ろしてみれば、ボクの足元で小鳥がピィピィとか細く鳴いている。

どうしたんだろうとすぐ横にある公園の入り口の1本の木へ目を向ければ、上に鳥の巣が見えた。
なるほどここから落ちたのかと納得しつつ、小鳥を拾い上げると困ったようにキョロキョロとしている。
どうやらまだ飛べないようひな鳥らしく、ボクの手から逃げる様子はない。
ならこのままにはできないな、と木の傍まで歩く。
巣のある枝まではそんなに高くはない。今のボクの身長でも登れるだろう。
女の子が大股広げて木を登るなんてはしたない姿を見られたくないので、一応周りに人がいないか確認してから幹に手を掛ける。
男だった時のことを思い出しながらヒョイヒョイと昇っていくと、簡単に鳥の巣が目の前に見える高さまで来れた。
片手で持っていたひな鳥をそっと中に入れる。
「よしよし、もう落ちるんじゃないぞ」
ボクの言葉に反応した訳ではないのだろうが、その子は再度ピィピィと鳴いている。
元気な様子に顔をほころばせながら木を降りようとした時、不意にどこかから視線を感じた。
やばい見られたか、と思い振り返ったが、誰もいる様子はない。
慎重に辺りを見回してはみたが、ボク以外に人はいなかった。
気のせいかと思いつつも何か違和感。
でも人がいないことは事実だ。なんだか気味の悪さを感じてボクは足早に公園を出る。
「――見つけた」
だから、その声がボクの耳に届くことはなかった。

□

特に何事もないまま帰宅して両親と夕食も取り、お風呂に入ったボクは自室でゴロゴロとしていた。

二時間程前に芹にメッセージを送ったりもしたけど、未だ返事はない。
まだ用事が終わってないってことなのかな。
でもこれだけ遅くまで掛かる事って何だろうと疑問に思う。
まさか悪い人間に目を付けられてしまっているのだろうか……？
芹って可愛いし、目立つ存在であることは間違いない。
それで断れずにズルズルとのめり込んで……。なんて考えつつも同時にそんなことないかとも思ってしまう。
だって芹って分かりやすいし。
何かあれば顔からすぐに読み取れる。腐っても１０年来の付き合いなのだ。
芹の母親も特に変わった様子はない。であれば心配するようなことはしてないということだろう。
返信がないのも気付いていないだけかもしれない。
ボクは芹を信じている。芹が大丈夫だというのなら大丈夫なのだ。
ボクが今こうしてモヤモヤしていてもしょうがないし、そろそろ寝ることにしよう。
そう思って部屋の電気を消してから、窓に付けたカーテンを閉めようと立ち上がる。
月明りが夜空を照らしており、明るいとさえ感じてしまった。
良い月だなー、なんて感想を抱きながら遮光すると、まっすぐベッドへと向かう。
横になれば暗くて何も見えないし、何も聞こえない。
両親はボクが寝る前にはすでに布団に入っているし、当然と言えば当然。
何も考えず、あとは力を抜いて睡眠に意識を集中させるだけで、また朝がやってくることだろう。
今日も良い1日だったなあ、と振り返りながら瞼を閉じる。
……なのだが、何か様子がおかしい。
部屋が明るい。
部屋の電気は消してるんだからそんなことはあり得ない。

月の光にしたってこんなに部屋を照らすことは今までなかった。
なのにこの明るさは一体なんだろう。
たまらずベッドから起き、光源を探すことにした。
明るさが集中しているのは、どうやらカーテンを閉めている筈の窓際。
まるで布の後ろから直接ライトを当てているような、そんな様子を感じる。
（ストーカー、とか……？　いやまさかボクに限ってそんなことは……）
ゾッとするようなことを考えてしまうが、ここは2階である。
上ってこれるような足場はないし、何よりこんなボクにストーカーとかいる訳がない。
でも人だったら嫌だなあ、とカーテンを開けることを躊躇していたのだが、このまま横になっても気になってオチオチ寝てもいられない。
「……よし、女は度胸！」
考えあぐねた末、とりあえず窓の外を見ることを選択した。
下には家族が寝ている。もし不審者だったら起こして守ってもらうことにしよう。
ドキドキする胸を抑えながら勢いよくカーテンを開けた。
「……えっと、なにこれ？」
そこには人影なんて一切見当たらなかった。
でも代わりにここにあったらおかしなものが1つ。
「でかい、リンゴ？」
夜だというのに、その闇を消し去るように煌々と周囲を照らすリンゴのような果実が浮遊していた。
黄金のリンゴ？　いやまず浮いてるリンゴって何……？
光源の正体は判明したが、逆に知らなければ良かったと思ってしまう自分もいる。
あまりにも現実離れした光景に、混乱でうまく頭が回っていない。
そのせいか、ボクは浮遊している果実を手に取る為に、自室の窓を

開けてしまっていた。
ゆっくりとした動きで恐る恐る果実に触れると――それはより一層強い光を放ち、ボクはその明るさに飲まれる。
「うわあっ!?」
急な出来事に思わず声を上げてしまう。
光はすぐに収まり、チカチカした目を開けて見ると、辺りには静けさが戻っていた。
「あれ、リンゴは……？」
暗くなると同時に、目の前にあった果実が無くなっている。まるで最初からそこには何も存在してないかったかのように。
どんどん状況が変わっていく為脳の処理が追い付いていない。めまいがしてきた。
とはいえこのまま寝ますと言える程ボクの心臓は頑強ではない。一応母にでも報告しようかと1階に降りることにした。
すぐに母の寝てる私室の前まで来た。

「お母さーん。夜にごめんね。ちょっと変なこと起きて……」
コンコンと扉を叩き、反応を待つ。
待つ、が、全然反応がない。熟睡してるのだろうか。
「お母さん？」
恐る恐るドアノブに手を掛け、中に入った。
寝てるので当然だが部屋の中は真っ暗だ。
元々起こす目的だったので足音に気を配ることなくベッドへ。
でも違和感。
寝てるのであれば毛布がもっとこんもり盛り上がってても良い筈だ。
なのにまるで人が入っていないかのように薄い。
枕元まで来てようやく気付く。母はそこにいなかった。
「え、あれ？」
辺りを見回しても当然人影なんてない。
ボクが気付いていなかっただけで、お手洗いにでも行ったのだろう

かと思い、早歩きでトイレに向かう。
しかしトイレにも電気は点いておらず、中に母はいない。
夜に外出したのだろうか？　そんなこと今までしなかったのだけど。
今度は父を呼ぶことを考え、そちらの部屋にも行ってみる。
が、結果は同じ。お父さんも存在しなかったかのようにベッドから消えていた。
「ど、どういうこと……？」
軽くパニックになる。
分かるのはこの家から両親がいなくなってしまったこと。
これは普通に事件では……？
何とか大きく息を吸って落ち着こうと思うが、全く効果はない。
それでも警察に連絡することを思いつき、急いで自室に戻ろうかと思ったその時――。

『ズドーーン!!』

くぐもったような、何か落ちたかのような音が外から聞こえてきて、家を大きく揺らした。
「うえぇぇぇ!?　今度はなにー!?」
咄嗟に体を屈めたが、どうやら地震ではなさそう。
次から次へと予想だにしないことが起きて、ボクは今とてつもなくパニックになっている。
若干涙も出てきた。
しょうがないじゃん。女の子なんだもん。
とか言ってる場合じゃない。
状況を確認するためにまずは外に出なければ。
ガクガクした足がもつれそうになるのを必死にこらえつつ、なんとか上履きに履き替えて玄関の扉を開けると、その先には信じられない光景が広がっていた。
まず、ボクの視界がオレンジ色で埋まっている。

『それ』はどうやら液体状のもので構成されているらしく、向かい側にある住宅が透けて見えた。
その高さは家よりも大きいことから、優に４Ｍは超えてると思われる。
んでこれが何なのかって話なのだが、球体の液体らしいってことだけしか分からない。
ここまでならただの不思議物質（？）。
この物体の特質すべき点は、中心に大きな目玉が浮いているということ。
血走った目で辺りを見るかの如くグリグリ動かしてるのがまた恐怖をそそる。
「……ゲームで言うところのスライムってやつ？」
思わずぼそりと口に出てしまった。
するとボクの声に反応してか、そのスライムらしきものは目玉だけで振り向き、ボクを認識すると瞳孔を収縮させた。
まるでボクを獲物として見定めたかのように。

０３：魔法少女現る

今、岸波明日葉（きしなみあすは）は人生史上最大のピンチを迎えていた。
目の前には特大サイズの生きたスライム。それがまっすぐボクの方を見ている。
とても対話でどうにかなるようには見えない。
じゃあそんな奴が何をしてくるかと言うと……。
「とびはねたー!?」
当然襲ってくる訳だ。
スライムは体を縮ませると一気に上方向に自分を伸ばして宙に浮いた。
その巨体がボクに降り注いでくる直前、咄嗟に前方へ体を投げ飛ばすことで何とか避ける。
直後にものすごい爆音が後ろから聞こえた。
それを確認する為にスライムの方を見やると、図体がめり込んでボクの家の半壊している姿が……。
「あわわわ……」
あれが自分だったら、と思うと一瞬で背筋が凍るような感覚に襲われる。
「とにかく、逃げなきゃ……」
地面にダイブしたがために全身から悲鳴が上がっているが、そんなことを気にしてる場合じゃない。
痛みを我慢して立ち上がると、すぐに道路を走りだす。
後ろを横目で見やれば、家にもたれかかっていたスライムがボクの方へ向き直って飛び跳ねながら追っかけてきていた。
「た、たた、助けてーー!!」
大声を上げながら足を動かし続ける。
中学生の時に運動部だったおかげで、体力には自信があるつもりだったが、緊急事態の時にそんなのは関係ないってことをすぐに思い知らされた。
ボクが１０Ｍ進んでる間に、あっちは一跳びだけで１５Ｍ進んでく

るのだ。
そんなのすぐに追いつかれるに決まってる。
追ってくる音にたまらず後ろを見たが、もう肌が触れ合う寸前までやってきていた。
もう一度スライムがジャンプしたら、ボクはぺしゃんこになるだろう。
もう駄目だ、と思いながらも手で頭を覆いながら目をつぶった。
……しかしいつまで経ってもその瞬間がやってこない。
おそるおそる目を開けて振り返ると、そこにはまばゆい光を放つ『壁』のようなものがいつの間にか現れて、スライムの攻撃を防いでいた。
それと、壁とボクの間には白いローブを着る少女の姿が。
どうやらこの少女が壁を出したみたい……？
その少女が振り向くが、ボクは目の前の彼女に全く見覚えがなかった。
「貴方魔法使いでしょ！　なんで魔物から無抵抗で逃げ――って明日葉ちゃん!?」
「えっ。は、はいそうですが……」
強い語気だった彼女だがボクの顔を見るなり、目を大きく見開いてこちらの名前を言い当てた。
彼女とは全くの初対面の筈。
「明日葉ちゃんも魔法使いになったの!?」
「魔法使いって……？　というか何でボクの名前を知ってるの？」
こんな切迫した状況下で何呑気に質問を、と自分でも思ったが無意識に口に出てしまったのだからしょうがない。
ボクの言葉に目の前の少女はあからさまに動揺した様子を見せている。
「え!?　明日葉ちゃんわたしだよ――って、この格好じゃ分からないか……。えっと、先に魔物を片付けちゃうから、明日葉ちゃんは安全な場所にいて！」
こちらの返答を待たないまま、目の前の少女はボクから離れると杖

を構えながら何かを唱えだした。
日本語でもないし、英語でもないみたい。全く聞いたことのない言語。
少女が唱え終えた途端、スライムとボク達を隔てていた壁が縮小していく。
それが小さな球体にまで圧縮されたかと思った途端に、強烈な衝撃波を放ってスライムを大きく吹き飛ばしてしまった。
「はいっ!?」
４Ｍ程もある大きさのスライムが、まるで軽いボールのように舞い上がると弧を描きながら遥か後方に墜落した。
あんぐりとしているボクを尻目に、少女はそれを追いかけるように空へ上昇する。
そう、飛んだのだ。
アニメや漫画に出てくる超能力者の如く自由に空を飛ぶ彼女は、あっという間にボクの視界から消えた。
黄金の果実。消えた両親。地球上に存在してはいけない形状をしたスライム。魔法のようなものを扱う少女。
一晩で色々なことが起きすぎてオーバーロードしたボクの頭が出した結論は１つだった。
「――いやこれ夢でしょ」
あれだ、ベッドに最初に入った時点でボクは寝てたんだ。その直後に黄金に輝くリンゴが浮かんでる夢を見た、と。
そう考えれば全ての出来事に納得がいく。
物理的にも論理的にもありえないことだらけで混乱してた自分が馬鹿みたいじゃないかー。
「あははそっかー夢かー。じゃあさっさと起きないとなー」
「残念ながら夢じゃないヨ」
「え……ぎゃわーー!?」
急に横から声がしたと思ったら白いウサギを模したようなぬいぐるみが浮いていた。
「に、人形が喋ってる……!」

「もちろん喋るサ。ワタシは妖精だからネ」
「妖精……？　夢がまだ続いてるの……？」
　ぬいぐるみが首を横に振った。
「繰り返しになるがこれは現実だヨ。明日葉と言ったネ？　ちょっと着いてきてくれないカナ？　道すがら話せることは話すヨ」
「う、うん……」
　ボクに危害を加える気配は感じないので、とりあえずこの場は従うことにしよう。
　ぬいぐるみが前を飛ぶのを追っかけながら、さっき少女が飛んでった方向へと向かう。
　少ししたところでぬいぐるみがこちらに振り向いた。
「まず明日葉、君は魔法使いになって幽界へ来たのカナ？」
「魔法使いって、さっきの子も言ってたような……。それに幽界って何？」
　なんか小さい子供と大きなお友達が喜びそうな単語が聞こえてきたが、そんなの現実でいたなんて聞いたこともないんだけど……。いやあってたまるか。
「ふーむ、契約した気配もないし、ただ迷い込んだだけ……？　これは多分――」
「あのー？」
　ボクからの返答に、ぬいぐるみはブツブツと独り言を話している。チョイチョイと人差し指でつっつくとこちらを向いた。
「ああ、ごめんごめん。一通り話すつもりだけど、先にワタシの名前を教えておくネ。ワタシはディアンシー。別世界から来た妖精サ。長いからディナとでも呼んでくれ」
「よ、妖精ね。……えっと、別世界からボク達のいる世界に来たってこと？」
「そうだネ。ただ今君がいる世界は現実世界じゃない」
「え、どういうこと？」
　爆発のような音が段々と大きく聞こえてくる。
　どうやらあのスライムとさっきの少女の戦闘場所へ近付いてきて

いるらしい。
　とその前に色々聞きたいことがあるためディナと名乗った妖精を見る。顔らしきのところには丸い点と三角の口しかないため、表情から何かを読み取ることはできそうにない。
「ここは『幽界』と呼ばれる世界でネ。君達が普段生きている場所を『現界』と言う。現界と幽界は隣り合っていて、生き物が存在しない以外は全て現実世界と同じもので構成されているんダ」
「あっ。そういえばお母さんもお父さんも家にいなかった……」
　まるで存在しないかのように消えてしまった両親。それはボクが幽界という場所に移動してしまったからなのか。
「魔法使いにならなければ普通はこっちには来れない筈なんだが。不思議だネ」
「ああそうだ、魔法使いって一体何なの？　ボクも魔法使いなの……？」
　さっきの少女も魔法使いというやつらしいけど、彼女みたいにスライムを吹き飛ばしたり空を飛ぶなんて芸当出来る気がしない。
　でもディナは首を横に振った。
「君は魔法使いではないようダ。魔法使いとは文字通り元々魔力を持つ人間が、妖精らと契約して魔法を扱えるようになれるものサ。魔力は持ってないし、幽界に来ることは稀な筈なんだけどネ」
「そうなんだ……」
　まあ確かにさっきの子も、フリルのついた白いローブに付け襟のようなものを重ねていていかにもな格好をしていた。
　可憐で物理法則を無視した力を行使できて、とアニメや漫画に出てくる魔法少女そのものと言える。
　そーいうのに憧れを持つかと聞かれれば「Ｎｏ」と答えるが、飛んでみたいとはちょっと思う。
「じゃあさっきのスライムみたいなのは？」
「あれは魔物だヨ。幽界に溜まった魔力の淀みが実体化して、ワタシ達や人間に害をもたらすようになるんダ」
「魔物……。本当にこれが現実なの……？」

「君の気持ちも分かる。まあ今回の件はちょっと複雑でネ。あれはただの魔物ではないんだけど、君に説明すると結構長くなりそうだネ。一旦ここまでしておこう」
会話してる内に、爆発音がさっきよりも近くなっている。
それはさっきの魔法使いの少女とスライムの戦闘場所がすぐ傍であることを意味していた。

スライムの頭頂部がチラリと見えたのは住宅街から少し離れた一軒家の向こう側。
距離にしてここから２０Ｍと言ったところだろうか。その家の周りには大きな平地が隣り合っていて、ボク達は家を迂回するように歩く。
すると、さっきの少女がスライムと対峙している場面が視界に映った。
でもスライムはと言うと、すでに息も絶え絶えといったところか。
丸々太っていた体はあちらこちらが削れ、そこから体を構成していた液体がみるみる流れていっている。
ボクと最初に邂逅した時には殺意むき出しの瞳をしていたのに、今はどこか怯えたような印象を受けた。
立ち止まってお互いの様子を見ていたら、少女が杖を上に掲げる。
「今度はもう逃さないよ。『セイヴァー・フォール』!!」
少女が魔法（？）を唱えると、上空から光の十字架が４つ降ってきて、スライムの周りを囲んだ。
そうしてスライムの足元に巨大な魔法陣が表れ、次の瞬間には目を開けてられない程の光が放たれる。
もう一度視線を元に戻した時には、すでにスライムの姿は跡形もなく、その場所には巨大なクレーターが残っているだけだった。
「すご……」
本当に一瞬のできごとであった。未曾有の経験にその二文字の言葉しか出てこない。
住宅と同じ高さを滞空していた少女が、ゆっくりと地面に降りる。

するとディーナが彼女の元へと飛んで行った。
「お疲れ様、アロン」
「ありがとディナ。それに……明日葉ちゃんも来たんだね」
「は、はい」
ディナからアロンと呼ばれた少女は、ボクの顔を見ると何とも複雑そうな表情になった。
あれ、ボク何かした？
でも助けられた訳だし感謝の意は伝えておかないと。
「えっと、助けてくれてありがとうございます。貴方が来てくれなかったら危なかったよ」
「ううん、助けられたのはただの偶然なの……。でも、何事もなくて良かった」
「ちょっと擦りむいたりしたけどね。そんなことより貴方は一体誰なんですか？　ボクのこと知ってるみたいだけど」
「あ、それは……」
少女が言い淀むと、ディナは諭すように彼女の周りを飛んだ。
「アロン、いずれ明かす予定だったんだから今言っちゃった方が良いと思うヨ」
「うぅ～わかったよ～」
観念したかのように少女は顔を上げた。
杖を自分の胸元に掲げると、全身を包むように光が生まれる。
光が収まると、そこにはボクの学校のものと同じ制服に身を包んだ少女の姿が……ってあれ？
肩まで掛かる髪はサイドテールにして、顔立ちの整った女の子を、ボクは良く知っていた。
「え……芹（せり）……？」
「あはは……こんばんは、明日葉ちゃん」
ボクの幼馴染、初霜芹（はつしもせり）は困ったような笑いを浮かべている。
「え、なに、どういうこと？　さっきの女の子が芹なの!?」
「うん、そうだよ。わたし魔法使いなの」
「……えーー!?!!」

衝撃の真実を知らされたボクは夜中だというのに大きな声を上げてしまった。
芹が魔法使い……？
こんな細い腕にあのスライムを倒す力があるってこと……？
ヤバイ。今日の出来事の中で一番驚いてるかも。
「なんでなんで⁉　芹が魔法使いってどういうことなの⁉」
「ゆ、揺らさないで～……！」
「明日葉、一旦落ち着いてくれないかい？」
「あ、ごめん……」
無意識に芹の肩を掴んでしまっていた。
ふう、と息を吐いて心を静めながら芹を見つめ直す。
「……芹がさっきボクの家の前に現れた魔法使いで、スライムも倒してくれたってこと？」
「うん。驚かせるつもりじゃなかったんだけど、ごめんね」
「いや謝る必要ないよ。でも……顔が別人になってたけどあれも魔法なの？」
「そうだよ。でも実際に顔が変わってる訳じゃなくてね？　認識阻害っていう、『それが何なのか』わからなくする魔法なの」
「はえー……。覆面被るみたいな？」
「うーん、ちょっと違うけど、明日葉ちゃんが理解できるならそれでいっか。つまりはわたしみたいな魔法使いは変身すると自動的にわたしのことを芹だって認識できなくなるってこと」
「それで芹だってわからなかったんだ」
「そういうこと。あとは――」
「芹、明日葉と話してるところすまないけど、例のモノが回収できたヨ」
芹からの説明を受けてる途中、ディナが割り込んできた。その小さい手には金色に輝くリンゴのようなものが握られている。
「あっそれ！」
「え？　ああ、これは『マナの実』って言ってね？　ディナ達が住んでる世界に生ってる果実なの。理由は分からないんだけどこっちの世

界に落ちてきちゃって。それを回収する為にわたしが動いてるんだよ」
「マナの実って言うんだ……。それと同じ物がボクの家の前にも落ちてたよ。そのせいでボクは幽界に来ちゃったんだ」
「「え？」」
芹とディーナが同時に振り向く。
２人ともすごい勢いで詰め寄ってきた。
「明日葉ちゃんの家の前に……？　そ、それ、どこに行ったの!?」
「う、うーん。どこ行ったんだろ？　ボクが触れたら光って消えちゃったからさ」
「てことは明日葉ちゃんの家の近くにまだあるのかな……」
「え、さっきのスライムが持ってたものじゃないの？」
ボクが触れた果実＝今ディーナが手に持ってるもの、みたいに思ったんだけど、芹は首を振っている。
「ううん、違うものだよ。あのスライムはわたしが夕方からずっと戦ってた魔物だもん。この実とはまた別の実が明日葉ちゃんの家に落ちてたって思う方が自然なの」
「そうなんだ。でもどこに行ったかボクにもわからないし……」
「そうだよね……。明日葉ちゃんはどこでマナの実を見つけたの？」
芹からの質問に、ボクは必死に思い出す。
たしか、寝ようとした時に部屋が明るいことに気付いて……。
「えっと、自分の部屋の窓の外かな。そこに光る果実を見つけて、気が付いたら幽界（こっち）に来てた、と思う」
確証がないから曖昧なことしか言えない。
でも芹とディナはお互いに頷いていた。
「ということはまだ明日葉の家の前にあるかもしれない。一旦そこまで戻ってみよう」
「そうだね。落ちてるかもしれないし、急いで探さないと」
また来た道を引き返すのかと思うと気が滅入るが、四の五の言ってられないだろう。
と思ったら、芹が手を差し出してきた。

「明日葉ちゃん、わたしの手を掴んで」
「え、手を繋ぎながら歩くの？」
「……それも魅力的な話だけどちがくて、魔法で一気に飛んじゃうの」
「そんなことまでできるの!?　便利だね……」
　大人しく芹の言うことを聞き、手を握ると彼女は目をつぶった。
「指定座標設定完了……対象は3名。――『ジャンプ』」
　すると、視界が一瞬暗転して、気が付くと見知った道にボク達は立っていた。
「うわ、ボクの家の前だ！」
　ほんとに帰ってこれた。これが魔法か……。
「じゃあディナお願いね」
「承知したヨ。『サーチ』」
　ディナの小さい体の足元に魔法陣が生まれた。
　そこから細い光の線のようなものが伸びていき、あちらこちらに散らばっていく。
　しばらくしてから、芹がディナに話しかけた。
「どう、ディナ？」
「ふーむ。マナの実の反応は無いネ。もしこの周辺にあるのならマナを発してないことなんてことは無い筈」
「明日葉ちゃんが触ったから逃げちゃったとか？」
「それこそあり得ないかナ。マナの実に意思がある訳じゃないから、その場を動くということはできないのサ」
「じゃあ現界に置いてけぼりになっちゃのかな？」
「無い話ではないだろうけど、普通は果実を手に取った瞬間一緒に幽界に飛んでしまうと思う」
「でもこっちに無いんだったら、現界を探すしかないと思うよ？」
「そうだネ。芹の言う通りにしよう」
「明日葉ちゃんごめんね。もう一回わたしの手を握って」
　再び芹がこちらに手を伸ばしてきた。
　特に拒む理由もないので言うとおりに。でも気になることを1つ聞いておこうかな。

「ところでマナの実ってそんなに危険なものなの？　ただのリンゴみたいな果実にしか見えないんだけども……」
芹の方へ身を寄せて手を握りしめながら聞くと、真剣な目で頷いてくる。
「マナの実事自体が問題にはならないんだけど、その名の通りマナを生み出すものなの。マナは生き物が生きていく為に必要なのと同時に、幽界で魔物も出てきちゃうんだ。魔物は人を襲うから駆除しなきゃいけないんだよ」
「ボク達の世界にも魔物は現れるの？」
芹は首を横に振った。
「現界には出てこないよ。でも本来マナは現界には存在しないから、マナが供給されることで何が起こるか分からないの」
「それで急いでるんだね……」
ひょっとしたら大変なことが起きるのかもしれないのか。想像できない分、かなり恐怖を感じる。
「そうだヨ。明日葉の家にまだ残ってるのなら早急に回収したい。芹の方は準備できたかい？」
「もう魔力は溜まったよ。明日葉ちゃんちょっと気分悪くなるかもしれないから気を付けて――『リバーサル』」
芹が再び魔法を唱えると、足元が消えるような感覚を覚え、辺りの景色がグニャリと曲がる。
それは一瞬で収まり、パッと見変わったように見えなかったけど、ハッキリと変化したことがあった。
それは音だ。
先ほどまではボク達3人の会話しか聞こえなかったのに、遠くから車の音が聞こえてくる。
人がいる証拠だ。
しかもスライムに潰されたボクの家も元通りになっていた。
これで、ようやく元の世界に戻ってきたということなのだろうか。
なんだか自然とため息が出る
ボクが1人で安堵している間に、芹達はこちらから離れて話し合い

をしていた。
「ふーむ……、こっちにも無さそうダ」
「本当に？　明日葉ちゃんが幽界に飛んだ衝撃でどっかに行っちゃったってこと？」
「可能性は低いが、それも視野に入れなきゃいけないカ……」
「うーん」
芹とディナが同時に首を捻ってしまった。
素人のボクが口を出したところでなんにもならないだろうし、その様子を静観しておくことに。
しかし、あーでもないこーでもないと議論を交わしても、結局結論は出ないみたいだった。
ディナが諦めたように息を吐く。
「しょうがない。今日はもう探索は無しダ。２人も学校があるだろうから休んだ方がいいヨ。マナがすぐに影響をもたらす訳でもないし、明日でも大丈夫だろう」
「うーん、それしかないかあ。じゃあ明日葉ちゃんとはここでお別れだね」
「でもボクの家、鍵閉まってるんだけど……」
「そこは大丈夫だよ。ちゃんと部屋まで送り届けるから」
芹がそう言ってさっきの『ジャンプ』の魔法をまた唱えると、一瞬でボクの部屋まで跳んだ。
どういう原理で作用してるのかさっぱりわからない。きっと一生理解できないことだろう。
「じゃあ、わたし達も帰るから明日葉ちゃんもゆっくり休んでね」
「あ、えっとね、芹」
「うん？　なあに明日葉ちゃん」
「また明日ね」
ボクが口にした言葉に、芹は何故か驚いたような表情を作ったが、すぐに大きな笑みを作った。
「うん！　また明日！」
そう言うと、芹とディーナは浮遊してから一瞬で消えて、部屋には

ボク1人だけとなる。
ハッとして自分の服装を見ると、地面に飛び込んだせいでボロボロになっていた。
流石にもう着れないだろうということで着替えることに。
その際ちょっと汗をかいてしまったことが気になったが、今からシャワーを浴びる体力はないので寝間着を取り替えてすぐにベッドに入る。
今日あった出来事を思い出そうとしたけれど、どうやら体の方は思ったより疲れ切っていたらしく、すぐに眠気がやってきた。
頭が混乱しすぎて目が回りそうだったが何とか生きている。
それだけでも儲けものなのだろう。
何が起きているのか、それは芹に会えば分かることだ。
質問を考えながら、ボクはすぐさま眠りについた。

０４：帰ってきた平穏

カーテン越しに太陽が部屋を照らし始め、意識が段々と覚醒していく。
頑張って瞼を開けてスマホを探し時間を確認したところ、いつもの起床時間よりも全然早かった。
なんだ。もうちょい寝れるじゃん。
厚い毛布を再び自分の肩まで掛けて、ゆっくりと目を閉じる。
昨日は遅くまで頑張ったから、まだ起きたくはない。
休める時休むのがボクのモットーなのです。
両親もまだ起きてきたばかりだろうし、今起きても特にすることはない筈。
……ん？　両親？
「忘れてたー!!」
ガバリとベッドから飛び起きると、普段心掛けてるおしとやかさも金繰り捨てて、階段をドタドタと駆け降りる。
階段を降りた先の廊下。その奥にはリビングがあるのだが、ボクが起こした騒音を聞きつけてか、１人の女性がヒョッコリ顔を出した。
「なあに明日葉？　朝から大騒ぎして」
お母さんだ。
怪訝そうな顔でこちらを見ている。
「……いる」
「いるって何が？」
「ふわあ……どうしたんだ明日葉。近所迷惑になるぞぉ？」
ボクの呟きに首を傾げる母。それと自分の寝室からお父さんも出てきた。
確かに２人とも存在している。
昨日は色んなことが起きたけど、その始まりは両親が消えてからだ。
それらは全部解決したようだけど、もし両親が消えたままだったらと思えば、居ても立っても居られなかった。

でも2人とも無事なようで一安心。
「あ、えっと、ちょっと寝ぼけちゃって……」
「あらそうなの。何か怖い夢でも見た？」
「夢……まあ、夢みたいなもんだけど……」
「？　変な子ねえ」
「なんでもない。なんでもないよ……アハハ」
お母さんは首を傾げてる。
まさか本当のことを話す訳にもいかず、笑って誤魔化すことに。
朝から走ったせいで息が上がってるけれど、それで昨日帰ってきてからシャワーを浴びなかったことを思い出して一先ず風呂場へ。
脱衣所でパジャマも下着も全部脱いで、頭からお湯を被る。
「ふう……」
ベタベタしていた肌から汗が流れ落ちていく感覚が気持ちいい。
何気に朝にシャワーを浴びるのは初めてかもしれない。
それも昨日動き回ったおかげではあるんだけど。
昨日の出来事をまとめれば、この世界によく似たもう一つの世界が隣り合っていて、そこには魔物というものが生まれて、魔物と戦う魔法使いという存在がいて、しかもその魔法使いがボクの友人で、ということらしい。
でも、自分の境遇を考えればちょっと納得がいく。
ボクは前世の記憶を持つ人間だ。
それはつまり普通の人とは違う生き方をしているということである。
もの悲しい人生を歩んではいたけれど、それでも他人と特別なにか違うことはなかった覚えがある。
それが今世になって、昨夜いきなり魔法や魔物といったものに触れた。
ボクの経験も合わせると、この世界ではボクの知らないところでまだまだ不思議なことが溢れてるのかもしれない。
そんなことを考えながら10分程シャワー浴びて綺麗さっぱりしたボクは、ドライヤーで髪を乾かすと下着姿のまま自室に戻って制服

へと着替えた。
髪型などおかしなところがないかチェックしてからリビングに降りて、いつものように両親と食事を取る。
その最中にボクの朝の行動について再度聞かれたが、あんまり両親を心配させたくないので悪夢を見ただけと言ってごまかした。
食器を片付けて歯を磨き、身だしなみを整えているとインターホンの鳴る音がした。
「ん？　こんな朝早く誰だろう？」
階段を降りて扉ののぞき穴を確かめてみる。
そこには良く見知った人物が立っていた。
「……芹？」
ドアを開ければ、こちらを視認した芹の顔が笑顔になる。
「おはよう明日葉ちゃん」
「おはよう。珍しいね、芹がボクの家に来るなんて」
芹の家は学校とボクの家の間にあるので、道をわざわざ往復することとなる。
だから朝に芹が来ることなんて無かったんだけど……。
彼女はこちらの質問に答えようとした瞬間、ボクの後ろから声がした。
「あすはーお客さん誰だったのー……って芹ちゃんじゃない。久しぶりね～」
「おはようございます、おかあ様。ちょっと早起きしたものですから」
「あらあ、そうなの。芹ちゃんもしっかりしてるわねえ」
「いえいえ、明日葉ちゃん程ではありませんから」
うちのお母さんと芹が世間話をしているけれど、何やら話があるんだろうし、早急に切り上げた方が良いのかなと思って割って入る。
「芹も来たことだし行ってくるよ。それじゃあねお母さん」
「はいはい。２人とも気を付けていくのよ」
母親の言葉を背に、２人で通学路を歩く。
「明日葉ちゃん、昨日はよく眠れた？」
「うん、疲れてたからベッドに入ったらすぐ眠っちゃったよ」

「良かったぁ。体の方も心配なさそうだね」
周りから見れば女子高生同士が他愛のない会話をしているように見えることだろう。
それはボク達に昨日何が起きたか知らないからだ。
「……ビックリしたでしょ。わたしが魔法使いだって知って」
芹は、若干声を潜めながらボクの方を向いた。
「うーん、確かに驚いたけど、もう受け入れつつあるっていうか……」
「そうなんだ。流石明日葉ちゃん。大人びてるっていうか、すごく落ち着いてるよね」
「そ、そうかなあ？　普通だと思うけどね～……」
精神年齢的には倍近く生きてると知ったら、彼女はどんな顔をするのだろう……。
「ううん、普通はもっと驚くと思うよ？」
「まあ、確かにそうかもね」
昨日の時点では色んなこと起きすぎて、めちゃめちゃ驚いてたし。
落ち着いているように見えるのは、一晩寝て気持ちの整理が付き始めてるからだ。
芹的にはもっと驚いてほしかったのだろうか。
でも横を歩いている彼女はどこか安堵したような表情をしている。
「わたしは嬉しかったなあ」
「嬉しい？」
「うん。明日葉ちゃんなら受け入れてくれるんだろうな、って思ってたけど少し不安で……。このまま別れることになったらどうしようかなって……」
「芹……」
確かに、他人に言えないことを語るというのはかなりの勇気が必要だろう。
それこそ本当に信頼できる人でないと。
魔法のことを語ってくれたということは、芹にとってボクはそういう人間だと思ってくれたからか。
それなら嬉しいな。

「昨日『また明日ね』って言われて、関係が何も変わらないんだなって分かって、心のつかえが取れたの」
「それはそうでしょ。ボクは芹に何があっても友達だよ。そこは心配しないで？」
「……ありがと」
なんか、若干落ち込んだような素振りを見せたけど、ボク何か変な言ったかな……？
すぐに表情を戻して芹は続ける。
「でも、すごく恥ずかしい姿見せちゃったよね」
「え、何が？」
芹の言いたいことがちょっと読み取れない。
「わたし、明日葉ちゃんの前で思い切り呪文唱えたりしたじゃない？
今までは1人だったから気にしてなかったんだけど、明日葉ちゃんから見ればイタイ子なのかなって思って……」
「あー」
高校生がアニメみたいに必殺技を叫んだりするのが恥ずかしいことだという気持ちはとても分かる。
ボクも前世では……いやこの話は止めておこう。
「本当は全部終わってからわたしの部屋でただ変身した姿だけ見せて、わたしが魔法少女だって伝える予定だったの。それなのにまさか明日葉ちゃんが幽界に来ることになるなんて……」
「でも別に良くない？　ボクと芹と、ディナだっけ？　あの妖精しか見てなかった訳だし近所に見られたんじゃないんだからさ」
「う～……そうなんだけどぉ。明日葉ちゃんにドン引きされるのは嫌なの」
要はボクには戦う姿を見られたくなかった、ということなのだろう。
ここは慎重に言葉を選ばないと芹を傷つけることになるかもしれない……。
いきなり難易度の高い問題が発生した。
顎に手を当ててちょっと考えてみる。

「……いや、ボクはイタイ子なんて思わなかったな。だって芹はこの世界に被害が及ばないように働いてたんでしょ？　それはすごく立派なことじゃない。しかも何の見返りもなくやってるんだからすごくカッコいいよ。それに、ボクは芹のこと尊敬してるしね。ずっと昔から」

芹は一度決めたことは絶対に曲げない意思の強さを持ってる。

彼女によって救われた人もいるし、そんな芹だからこそ周りに人が集まるんだろう。

「あ、明日葉ちゃんがわたしのこと尊敬してる……？」

「え、うん。頑張り屋だし、責任感もあるし、何にでも全力だよね」

「あわわ……恥ずかしいよ明日葉ちゃん」

頬に手を当てて真っ赤にしている芹の様子がとても可愛らしい。

ボクが女でなかったら彼女にしたいくらいだ。

……いや、何を考えてるんだボクは。もし男のままだったら高根の花過ぎて近付きすらできないだろうに。

でもまあそれくらいの魅力が彼女にはあるということだ。

ボクには持ってないものを、芹はたくさん持ってるということである。

「駄目、駄目だよ」

しかし、当の本人の様子がおかしい。

「明日葉ちゃんがわたしなんかを尊敬しちゃいけないよ！　尊敬されるのは明日葉ちゃんの方なんだから！」

「……なんて？」

「明日葉ちゃんはわたしなんかを敬っちゃ駄目なの……！　明日葉ちゃんはね、とってもすごいんだよ。誰にでも手を差し伸べるし、いじめも止めてみせたし、すごく勇気があるの。わたしにできないことを簡単にやっちゃうの。それから――」

「いや待って。待って芹。そんなことないから。ボクはそんなだいそれた人間じゃないから」

突然芹が暴走してしまった。

なんとか静止しようと試みるが、彼女の勢いを止められない。

結局学校に着くまで芹のトークが止まることはなく、ボクはそれはもう真っ赤な顔で教室に入りクラスメイトから心配されることとなった。
うぅ、なんでこんな目に。

□

「ひどいよ、芹……」
「ご、ごめんね、明日葉ちゃん」
太陽がちょうど真上に位置した昼下がり、ボク達は屋上に出てご飯を食べていた。
朝から十数分にわたって、惚気話のように永遠と恥ずかしいことを言われたボクのメンタルはすでにボロボロだ。
午前の授業もどこか上の空だったことからも、ボクの状態が伺いしれるだろう。
芹の方はすっかり冷静になったようで、さっきからしきりに謝っている。
別に悪口言われた訳ではないのだけれど、やっぱりちょっと仕返ししたくてジト目で彼女を見つめると、芹は更に縮こまってしまった。
その様子を見ると流石にいたたまれないのでここら辺で許すことに。
「……はあ、もういいよ。芹も悪気があってのことじゃないし」
「本当にごめんね……。ずっと思ってたことだから止まらなくなっちゃって……！」
実際問題、芹の言う通りにボクが誰かを助けたりしたことなんてのはあまり記憶にない。
いじめを止めることができたのだって、たまたまそういう現場を見たからに過ぎないのだ。
あれは芹が一緒にいてくれたおかげである。
彼女がいたからボクは動いただけで、自分の力だとは思えないんだよね。

そう考えると、芹はボクのことを持ち上げすぎなだけだ。
てか、この話題はもういい。
「じゃあ代わりに魔法のこと教えてよ」
このままションボリしたままの芹の姿は見たくないので、話題を変えることにする。
「そんなので良いの？」
「うん。でも魔法のこと話しちゃいけない制約とかあったりしない？大丈夫？」
他の生徒達とは離れてるから聞こえる心配はなさそうだけど、一応声のトーンを落として話す。
芹はと言うと、箸を置いて「んー」と考え込んでいた。
「別にないと思うよ。昨日だってディナの方から説明あったんでしょ？　わたしだけ喋っちゃいけないなんて言わないと思うし、良いんじゃないかな」
そんな簡単に決めちゃっていいのか……。
まあディナも色々教えてくれたしそういうものなのかもしれない。
まずは最も気になってるところから。
「早速だけど芹っていつから魔法少女になったの？」
「中学2年生の時の春だったからちょうど2年前かな？　ちょくちょく授業抜けたりしてたと思うけど」
「ああ、そんなことあったね」
確かに2年生になってから、授業をすっぽかしたことのない芹が具合悪いと言って早退したり、休んだりするようになった。
おかしいなとは思っていたけれど、あれは魔法が原因だったのか。
ようやく腑に落ちた。
「じゃあその時にディナと会ったってこと？」
「うん。幽界が大変なことになってるから手伝ってほしいって言われてね？　あの時は忙しかったな～。昼間は学校に行かなきゃいけなかったし、その時に魔物が現れたらって思うと気が気じゃなくて。何回も休んじゃうと親にも先生にも申し訳ないし」
「そうだよねえ。でも、それだったらボクに言ってくれれば良かった

のに。何かあれば手伝ったよ」
芹は1人で抱え込みやすいから、ボクの方から声を掛けるようにはしてるんだけど、それでも話さない時があった。
魔法のことみたいによっぽど重要なことだとは理解してるけど、大変なら相談してほしかったという想いが強い。
でも芹は首を振った。
「ううん。昨日の魔物に襲われて分かったと思うけど本当に危険なの。明日葉ちゃんは責任感強いから平気そうにするだろうけど、最悪なことが起きたらって思うと、どうしても話せなくて……」
「そっかあ。まあ確かに怖い思いしたよ。あれは魔法なんてものがなければあっという間に死んじゃいそうだね。気遣ってくれてありがとね」
「わたしもなんだかスッキリしたかも。安全が分かるまではって思ってずっと話さなかったけど、ようやく打ち明けられて安心したよ」
「そっか。魔物とかにボクができること何なさそうだし、芹に任せっきりにしちゃいそうだね」
「それで良いと思うよ。伊達に2年も魔法少女やってないし明日葉ちゃんが心配することは何もないからね」
芹は唐揚げを食べながらとびっきりの笑顔を見せた。
それが心のつっかえがようやく取れたことから出る表情だと分かると、なんだか申し訳ない気持ちになる。
それをそのまま話すと、また芹の顔が曇りそうだから言わないが。
質問を続けることにする。
「それで、ボクの家の前にあったマナの実って見つかったの？」
「ディナが今探してると思うけど、全然連絡こないし駄目そうかなあ」
「そっか。まあマナの実が何なのかもいまいちわかってないんだけどね……」
卵焼きを食べながらぼやく。
それについて、芹が詳しく説明してくれた。
「昨日ちょっと説明したと思うけど、マナの実はその名の通りマナを生み出す果実なの。マナって言うのはこの世界の生き物と、ディナ達

のような存在が生きていく為に必要不可欠な物質なんだって。これがないと生物はたちまち死滅して、幽界みたいな世界になっちゃうんだよ」
「え、すっごい重要なものじゃん」
「そう。だからわたし達も必死に探してるの。それともう1つ大変なことがあってね。現界でマナの実に触れた人は、魔法が誤発動しちゃって勝手に幽界に連れてかれちゃんだって」
「……昨日のボクみたいにか」
「助けられてホントに良かったよぉ。明日葉ちゃんが死んだらと思ったら、わたし……」
「でも芹のおかげでこうしてピンピンしてられるんだからさ。あまり気に病まないで？」
芹が間に合わなかったら、ボクは行方不明者として処理されていたことだろう。
想像しただけで怖い。
「ありがと。ディナの推測ではマナの実を手にしたせいで幽界に迷い込む人が出てくるかもって」
「急がなきゃいけないね……。それってすぐに見つけられないものなの？」
「うーん……明日葉ちゃんも昨日見たけど『サーチ』の魔法を使わないといけないの。でも感知範囲はそんなに広くないから一定区間ごとに掛けなきゃいけなくて……」
「あれを何度もかあ……」
範囲としては家１０軒分くらいといったところか。それを何度もやることになると考えると気が滅入る。
「わたしが休んだら不味いだろうってことで、日中は現界をディナが1人で探してくれてるの。なんか申し訳ないけど、日常生活優先だって」
「それで見つかれば良いね。てゆうかあの実ってどこにあったものなの？　急に生えてきたとかじゃないよね？」
そんなことになったら世界的にニュースになっていることだろう。

でもそうではなさそうだ。
「マナの実はディナ達の住んでる『妖精圏』って世界に実ってるんだけど、なぜか一昨日の夜に幽界と現界に落ちちゃったみたいなの。
幽界のものは魔物が取り込む分見つかりやすいんだけど、現界の方はどうなるか分からないからちょっと怖いよね」
「それってなんで落ちてき――」
「あ、待って明日葉ちゃん」
「なんで落ちてきたの？」と聞こうとしたら芹に手で制止される。
「ど、どうしたの？」
「誰か屋上に上がってくるみたい」
ボク達が座ってるのは、ちょうど屋上の入り口がある塔屋の真正面だ。
入口との距離はおおよそ４Ｍ程だから、もしかしたら話を聞かれるかもしれないということで話を遮ったのだろう。
それにしても、魔法って人の接近まで分かるのか……。ホント便利だなあ。
思わず塔屋の方を見やると、すぐに扉が開かれた。
現れたのは２人の男子学生。
「ここにいるって聞いたけど……」
「お、ちょうどそこに２人ともいるじゃん」
１人がキョロキョロと辺りを見回してる最中、金髪の男がこちらを見つけて、２人で近付いてくる。
「おう、岸波と初霜」
「昼飯のところ悪いね。ちょっといいかな」
「飯野君と七尾君。どうかしたの？」
「おいっすー」
先程の話を聞かれてないかドギマギしながら、適当を装い挨拶する。
芹が飯野と呼んだ男子生徒の名前は飯野（いいの）学（まなぶ）。
黒髪ではあるが垂れ目と仄かに太い眉毛が特徴的な爽やかイケメンである。

一年生の間では超がつくほど人気であり、他校にもファンがいるんだとかいないんだとか。
もう1人は七尾俊輔(ななおしゅんすけ)。金髪でツリ目という不良みたいな容貌だけど、これまた容姿が整っており、2人が揃ってるだけで歓声が上がるほど。
どちらにしろ知名度が高いということだ。
2人とも小学生の時からずっと同じ学校であったから面識があるけれど、何の用事で来たのだろうか？
幾人もの女の子を虜にしてきた笑顔を見せながら飯野が答える。
「先生に同じ委員会のメンバー集めてほしいって言われてさ。昼休みに悪いんだけど、初霜に着いてきてほしいんだ」
「え？　わたしは良いけれど……」
そう言って芹がこちらをチラリと伺う。
話の途中だったからどうしようかと思ってるのかもしれない。ボクの方は急ぐこともないので飯野の方を優先させる。
「ボクのことは気にしないで。飯野もあんまり芹に無茶させないでよね？」
「あはは、それは大丈夫。ちょっと手伝ってくれたらあとは俺らでやるからさ」
「明日葉ちゃんが良いなら……」
芹はお弁当をしまうと、飯野の横を歩きながら塔屋をくぐる。
その間何か話してたようだけど、ここからは聞き取れなかった。
……しっかし、超絶美少女と超絶イケメンが並んで歩く姿は様になるなあ。
ベストカップリング賞みたいなのがあったら確実に優勝することだろう。
ボケーっと見てる間、七尾はボクの傍を離れなかった。
「あ、ごめん。俊輔は何の用事だったの？」
「いんや、俺は学(まなぶ)についてきただけ。なんかある訳じゃねえよ」
「そうなんだ。じゃあ教室に戻らないの？」
扉の方を見ると、身長の高い飯野の後ろ姿が一瞬確認できた。

「……岸波もさ、学のこと……」
「うん？　飯野がどうしたの？」
塔屋を見ていたボクに対し、七尾が何か意味ありげなことを口にした。
でもそれ以上の言葉は、頭をガシガシと掻くだけで出てこない。
「やっぱいいわ。んじゃ俺は教室戻っから岸波も遅れんなよ」
「え、うん。わかった」
それだけ言って七尾は屋上を後にした。
残されたのはボク1人だけ。
午後からの授業まではまだ時間もあるし、自分のペースでゆっくり食事を取ることにしよう。
卵焼きを箸で口に運びながら、ボクは空を見上げた。

０５：絡みつく不穏

ご飯を食べ終えて教室に戻っておいたら、午後の授業が始まる５分程前に芹達が帰ってきた。
彼女に話を聞くと、美化委員会のメンバー全員を招集して仕事をさせてたらしい。
環境美化月間とか始まるのかな？
芹は魔法少女の活動もあるから両立が大変そうだ。
同じ委員会に入ってフォローすれば良かっただろうか？　今更言っても遅いんだけどさ。
その後、午後の授業も終え学校から帰る途中、ボクは芹から魔法の話の続きを聞いていた。
マナの実がこっちの世界に落ちてきたのは一昨日の夜。その衝撃で住宅街の道路が一部陥没したりしたらしい。
昨日の朝にやってたニュースを思い出し、なるほどそれが原因だったのかと妙に納得した。
ドリルで削岩したとかならまだしも、コンクリートを削るなんて相当な力が掛からないと無理だしね。
そんで果実への対処をする為に、夜遅くに芹が動いてたから眠たそうだったと。
「でもさ、そのマナの実がこっちの世界に落ちてきた原因って結局なんなの？　そういう大事なものってしっかり保管されてたりするものだと思うんだけど……」
「うーん、それがね……」
困り顔で、ちょっと罰が悪そうに芹が話を続けた。
「……分からない？」
「うん。妖精が住む『妖精圏（ようせいけん）』の中心部には神殿が建てられてて、そこに祀られてたらしいんだけど、誰かが無くなってたことに気付いて大慌てしてる内に現界（こっち）に落ちてたって分かったの」
「それって、誰かがマナの実を盗み出したってこと？」
誰が？　何のために？

「……マナは妖精圏だけじゃなく全部の世界で重要なものだから、そんなことするメリットってないんだよね。すぐに枯渇するわけじゃないけど、マナの実がないと供給が需要に追い付かなくなっていずれ全部の生物が死んじゃうよ」
「意味分からないじゃん……。何が目的なんだろう……」
　なんか一気にきな臭くなったなあ。
　マナの実が落ちてきた、じゃあそれ全部集めれば解決だね。とはならないのがまた……。
「でもマナの実を集めないといけないのは変わらないよ。バラバラになったマナの実を揃えていくとその人の願いが叶うんだって」
「なんじゃそりゃ。すごい便利なものじゃん」
　どこの竜の玉の物語だよ。
「だから集め切っちゃって、マナの実が落ちてきた原因を教えてって願えば事件も解決すると思うよ」
「意外と簡単な解決方法なんだね」
「そう。見つけるのが大変なんだけど……そんな明日葉ちゃんに朗報です」
　芹が急に足を止める。振り向くと耳に手を当てて誰かと通話でもしているようだった。
「今ディナから連絡が入ったよ。幽界の商店街の近くで特徴的なマナを感知したって」
「ホント？　ひょっとしてボクが最初に見た方の実かな？」
　そういえばディナは日中から果実を探してるのか。
　それにしても、魔法を使えば離れた位置同士でも会話ができるのか。便利すぎる。
「それはどうだろう。マナの実が動く可能性の方が低いし……。ナンバリングでもされてれば別なんだけどね」
「そっかあ……」
　家の近所で魔物が実体化するなどの悪夢を見る前に、早急な駆除をお願いしたいところである。
「でも近いうちに必ず見つけるから明日葉ちゃんは安心してね。――

それじゃあわたしはディナと合流するからここでお別れだね。バイバイ」
「うん、気を付けてね？」
芹は手を振ってボク達の住む家とは別方向に走り出した。
それにしても、芹は笑っていたけれど学校と魔法の両立って相当大変だな、と思ってしまう。
クラスメイトに怪しまれないように、それでいて緊急時には授業を途中で抜け出してなんてやってれば相当疲弊することだろう。
それを何でもないようにこなしてきた芹は、それはもうとんでもない精神力の持ち主だ。
ボクが同じ状況になったら、昨日みたいにただ叫んで逃げ回ることになるのが目に見えてる。
すごいなあ、とは思ってたけどここまでとは。
何も気付くことなく、平和な日常を過ごしてきた自分がなんだか情けなくなる。
ボクにできることって何かないかな？
真っ先に浮かんだのは芹の笑顔だった。
嫌なことがあっても笑顔を絶やさず、自分のできることを精一杯やるのが彼女の長所だろう。
それが逆に危ういということでもあるが。
自分の本心を隠すためではない、心からの笑顔を作ってあげることがボクの使命ではないだろうか。
その為にはどうすればいい？
日常生活での疲れを少しでも軽減できるサポートしてあげればいいのかな？
「それじゃあなんかもの足りないなあ」
芹は下手すれば死と隣り合わせの生活を送っていると言える。
だったらもっと直接的に癒やしを提供してあげた方が良いだろうか。
昨日チラッと話題に出てたウェイトレス姿で出迎えする、とか？
……うーん、ボクのそんな姿見たい人いるのか疑問だな。

そんな誰得なことしなくても、魔法を使えればこんなに悩む必要もないんだけどなあ。
昨日芹が発してた魔法は何と言ってたっけ？
「――そうそう、『リバーサル』だ」
別に魔法を唱えたかったとかそんな気は全然無く、ただパッと思い出した単語を口にしただけだった。
ところがその瞬間、足元が消えるような感覚を覚え、辺りの景色がグニャリと曲がる。
「え」
光はすぐさま収まったが辺りの景色に変化はない。
でもボクはすぐに異変を察した。
鳥の鳴き声や遠くに響いていた車のエンジン音などの、耳に入る情報がすべて消えたのだ。
ここはボク達の住む世界ではなく、『幽界』と呼ばれる場所であった。
「え」
なんで？
ディナの話では、ボクには魔力は無いんじゃなかったの……？
じゃあ偶然近くで芹が魔法を使ったのだろうか。試しに大声で呼びかけてみた。
「おーい、せりーー？」
一切の生き物の気配が無い中、ボクの声だけが木霊している。
しばらく待ってみても、一向に反応は返ってこなかった。
ヤバんじゃないの、これ。
「落ち着け、落ち着け……。もしボクが魔法を使えたのならもう一回呪文を唱えれば戻れる筈……」
わざと声を出すことで自分を落ち着かせながら、もう一度頭の中に魔法名を思い浮かべた。
「えっと、『リバーサル』！」
しかし何も起こらない。
相変わらず喧騒は消えてままだし、特に体に変化も訪れない。

さっきのは一体なんだったの、とどんどん不安感が心の中から這い出てくる。
――1人は嫌だ……。怖い……。
前世でのトラウマを思い出し掛けるが、ハッとなって頭を振ることでネガティブな思考を消し去る。
何度か深呼吸をしながら時間を掛けて冷静さを取り戻すことにした。
……そうだ。幽界に来てるのであれば芹達もいる筈。魔法のことは彼女らに頼もう。
たしか商店街の近くと言っていたし、そこを目指すことにする。
「とりあえず、鼻歌でも歌っておこう……」
自分を落ち着かせようと、自分の好きな曲のメロディを口ずさみながら進んでいく。
商店街まで十数分もあれば到達できるし、不安感も段々薄れてきた。
……ここがどんな場所かも忘れて。

10分程して商店街の近くまで来ることができた。
もう少しで芹と合流できそうだ、と考えれば自然と心も明るくなってくる。
少し早歩きになってきた瞬間――ドンッという衝撃が道路の下を走った。
「ん？」
始めは気の所為かとも思った。
でもどこかにぶつかるような音は止まらず、段々とボクに近付いてくるかのように大きくなっていく。
何かヤバさを感じて逃げようかと考えた時にはすでに遅かった。
衝撃音がボクの真下まで来たかと思うと、突然目の前の道路に穴が開き、『何か』がボクの足に絡みつく。
「な、なに!?　って、うわあああ!?」
ソレに勢いよく引っ張られたかと思うと、上空で逆さづりにされて

しまった。
このままではパンツが白日の下に晒されてしまうので、必死にスカート抑える。
ってそんなこと考えてる場合じゃなくて！
一体何が起こっているというのだろうか、と足を掴んでいるものの正体を確かめる為にどうにか上に目をやる。
「タコの、足……？」
ボクが目にしたのは、空いた地面の穴から続く細長くて赤黒いタコ足のような物体。
いや吸盤がないので、単に触手と言うべきか……。
とにかくその触手がボクを宙づりにした犯人らしい。
これどう考えても魔物じゃん！
（はやく逃げないと！）
段々と頭に血が上ってしまうし、何されるのか分かったもんじゃない。
昨日のスライムの件を見れば、殺されてもおかしくないだろう。
どうにか足にへばりついた触手を取ろうと手を伸ばすが、宙づりのためどうにも力の入れ方が分からない。
どうすれば良いのか焦りを抑えながら考えていると、触手が次の行動に移ってしまった。
地面の方から再び異音がしたのでそちらを見たら、無数の触手が穴の中から出てきたのだ。
ギョッとしてる内にうようよと上昇してきて、こちらに段々と近付いてくる。
「こいつらまさか……」
前世で、とあるイケナイ本を見た時の記憶が蘇り、めちゃめちゃ嫌な予感がしたと思ったら……。
「待って……ひゃあっ！　く、くすぐったい……！」
数本の触手が制服にまとわりつき、さわさわとボクの体を這っていく。
不快な感触に抵抗しようと触手を捕まえようとしたのだけれど、ヌ

メってうまく掴めなかった。
こちらの意図を察したのか、触手はすぐにボクの腕を縛り上げて身動きを封じられてしまう。
なんとかしなければ、という思いとは裏腹に、体は完全に触手の意のままとなってしまっていた。
宙吊り状態から半回転して、頭が上を向くようにはなったが、そこから更なる恥辱を受ける羽目に……。
「ちょ……、こいつら服の中にい……！」
しばらく表面を這いずっていた触手達だったが、やがて制服の隙間を見つけ、先っぽから更に細い触手を出して侵入してきた。
直接肌に触れられている為か、先ほどよりもすごい不快感だ。
しかも、触手の表面はヌルヌルとした液体に覆われているので、摩擦も気にすることなくボクの身体を弄んでいる。
とにかくもう気持ち悪い。
どれだけもがこうとも、すでに全身に触手が行き届いているため全く意味がなかった。
「んうぅ！　ちょっと、変な声でるから、やめてぇ……」
その声が触手に届く筈はないけど、声を出さずにはいられない。
数分間全身をまさぐられて、抵抗できない程疲弊したボクの前に、一本の触手が姿を現した。
それは今までの触手とは違い、螺旋を描くように玉状の模様がついている。まるで穴を開けるために用意されたかのようだ。
疲れ切って虚ろな目でその触手を見ていたけれど、少ししてから螺旋状の触手は段々高さを下げていく。
ちょうどボクの足の高さまで来ると、股の間に狙いをつけて止まった。
その触手の狙いが分かると、サーッと顔から血の気が引いていく。
それだけはさせる訳にはいくまいと、必死に足を閉じようとしたが足を他の触手にガッチリホールドされているため、びくともしなかった。
その間も例の触手はこちらに狙いを定めて徐々に近付いている。

もはや抵抗する術はない。
初めては好きな人。
そんなピュアなこと言ってられる精神年齢ではないとはいえ、やっぱりそういう憧れは持っていた。
まさか触手に奪われることになるとは夢にも思わず、涙が勝手に出てくる。
グッバイ、ボクの初めて。
触手はもう下着のすぐそこまで迫ってきている。最早猶予はない。
諦めて覚悟を決めた瞬間、一筋の光がボクの真下を通過していった。その余波で螺旋状の触手が蒸発する。
「――え？」
上空を見上げると、大量の光の弾がボクの元へと降り注いでくる。
ギョっとしたけれど、全ての弾がボクの横を通り抜け、周りの触手にだけ当たった。
腕と足を縛っていた触手も撃ち落とされたことで、体が宙に浮いてそのまま落下することに。
地面にぶつかるかと思わず目をつぶってしまったが、フワリと柔らかい感触に包まれる。
恐る恐る目を開けて上を見ると……そこには芹の顔が。
「芹……！」
「大丈夫……じゃないよね。ごめんね明日葉ちゃん。もうちょっと早く来れれば良かったんだけど」
「ううん。来てくれてありがとう」
どうやら芹にお姫様だっこされているようで、その温かさに安心すると、また涙が零れ落ちてくる。
「うぅ、グス……」
芹の胸元をギュッと掴むと、彼女はポンポンと頭を撫でてくれた。
なんだか情けないが、そんなことを言ってられる場合ではない。とにかくもう芹の存在を感じられるだけで安心してしまう。
芹はボクをあやしながら地面にゆっくり下ろしてくれた。
「魔物退治しちゃうから、明日葉ちゃんはわたしの後ろを動かないで

ね？」
　二コリと笑った芹は、こちらに背を向けて触手が出てきた穴と対峙する。
　ゴゴゴッと何かがせり上がるような爆音がしたかと思うと、穴はどんどん広がっていき巨大な化け物が這い上がってきた。
　『ソレ』は人程に太い触手が重なりあって、さながら樹の幹のようになっている。樹と違うのは数えるのが億劫になるほどの無数の触手が生えていること。
　どうやらアレの中の数本がボクを捉えていたらしい。
　その不気味さに怖気が走る。
　しかし、芹には一切の動揺がないらしく、悠然と立っていた。
　触手の魔物は声を上げることもなく、自分に生えた触手を一斉にこちらに伸ばしてくる。
　それに対し、芹は巨大なシールドを自分の前に形成し、触手がそれに触れるとたちまち蒸発していった。
　芹は飛び上がり、１０メートルはある魔物を追い越して上空で停止する。
「わたしの――」
　芹が杖を上に掲げると、その先に超巨大な魔法陣が現れた。
「明日葉ちゃんに――」
　魔法陣が危険だと感じたのか、魔物は全ての触手を向かわせ芹を捕まえようとするが、芹の作る壁の前には無力だったようだ。
「何してくれてるのかなあ!?」
　芹の怒号と共に、魔法陣から光が降り注ぐ。
　……いやその表現は生易しすぎるだろう。
　正しくはとんでもない太さの光熱が、レーザーのように魔物へ襲い掛かったのだ。
　触手の化け物は一瞬で蒸発し、それでも魔法の威力は削れることなく、そのまま直下に落ちていく。
　あんぐりと口を開けているボクの目の前には、直径数十メートルはある巨大なクレーターができていた。

魔物が消えたのを見計らって芹が降りてくる。
「ふう、お待たせ明日葉ちゃん」
「う、うん。お疲れ様……」
若干ドン引きしているが、兎にも角にも助かった。芹がいなかったら今頃ボクはどうなっていたことか。
芹は近付いてくると、右手でボクの頬に触れた。
「平気？　怪我とかしてない？」
「大丈夫だよ。芹のおかげでなんともなかったし。ホントにありがとね。……ただ体は気持ち悪いかも……」
自分を見下ろすと、制服の前ははだけて乱れまくっており、ヌルヌルとした粘液がボクの身体を覆っている。
破れてないだけマシと言ったところか。
試しに手で触ってみるとヌチャリとしていて、そのままでは落ちそうにもない。
「あ、そうだよね。あんまりわたしの心情的にも良くないし……じゃあ『リフレッシュ』」
芹が魔法を唱えた途端、ボクの身体が光り、一瞬でヌルヌルが消えてしまった。
「え、すごい！　どういう原理なの!?」
「うーんとね、わたしの服が代わるのと似たような魔法、かな？　服を分子レベルまで分解して、衝撃に強くなるように再構築するんだけど、今回はそのローションみたいなやつを分解だけしたの」
「便利すぎ……。掃除なんてしなくてもよくなるじゃん」
「でも、普段は使わないように心掛けてるんだよ。世界の理を捻じ曲げちゃうのが魔法だから、よっぽどのことじゃないと使っちゃいけないってディナから言われてるし」
たしかにそうだよな、と思う。
特定の物質だけを分解したり、離れた場所に一瞬で到達したり。
そんな物理法則を無視した現象を世界の人々が目の当たりにしたら、魔法を巡った戦争が起きてしまうことだろう。
きっと芹も無事では済まない。それは嫌だ。

「気を付けなきゃね……。ところで、そのディナは？」
芹は真っ先に来てくれたらしいけど、白いぬいぐるみのような妖精の姿が見当たらない。
「ここにいるヨ～」
声が聞こえてきたと思ったら、芹が開けた穴からディナが出てきた。
その手は果実を掴んでいる。
「あまり本気を出しちゃいけないって言ってるだロ？　マナの実まで消滅したらどうするつもりだったんダ」
「えへへ、カッとなってつい」
舌を出して笑っている姿は大変可愛らしいのだが、やってることは相当えげつなかった。
……あまり深堀はしない方が良いのだろう。
「まったく……。それで、何故ここに明日葉がいるんだい？　転移してくる要因はもう無い筈だけド」
「あ、そうそう！　商店街で戦ってたら急に魔物が逃げちゃって、追った先に明日葉ちゃんが掴まっててビックリしたよ！」
２人に詰め寄られて若干後退する。
「えっと、自分でも分かんないんだよね。『リバーサル』って単語を口にしただけだもん」
「え……。それで、こっちに来てしまったのかイ？」
「多分だけど……」
「簡単な魔法ならその単語を発するだけでも発動するけど、魔力は使う筈だヨ？　明日葉には魔力は無い……ってちょっと待って」
「え、どうしたのディナ」
「芹、これ持っててくれ」
ディナの動きがピタリと止まり、芹にマナの実を預けてこっちに近付いてきた。
そうしてボクの胸の前に手をかざすと、その先から魔法陣が現れる。
その表情は読めないが、何か動揺したような雰囲気を感じた。

「魔力がある……？」
「え、でも昨日はないって言ってなかった？」
「ああ。ワタシがしっかり検査したヨ」
「どういうこと？」
「分からない……」
ディナは手を顎に当てて考えている。
しばらく黙っていたが、こちらを振り向いて口を開けた。
「1つだけ心当たりがある。ただ確信がある訳じゃないから詳しい話は待ってほしい」
え、なに？　何が起きてるの？
「えっと、ボク大丈夫なの……？」
「ああうん。死んだりはしないヨ。ちょっとワタシは妖精圏へ行ってきて相談してくる。明日葉は心配しないで待っててくれ。でも芹には話しておかなきゃいけないから、ここで解散かナ」
「え、良いの？　明日葉ちゃんから離れても危険なんじゃ？」
芹の言う通り、1人でいる時に何か異変があったら対処できない。
下手したらまた幽界に飛ばされるかも。
しかしディナは首を横に振った。
「ワタシの推察が正しければ、明日葉が魔法を口にしなければ平気な筈サ」
「まあ、ディナがそう言うのなら……」
話は終わりということで、解散することになった。
芹の『リバーサル』によって元の世界に帰り、それぞれ帰路につく。
芹は最後の最後まで心配してたけど、ボク達でどうしようもないのなら対処のしようもない。
漠然とした不安を心に残したまま、ボクは自分の家の玄関を開けた。

０６：親友!?

一抹の不安を覚えながら朝を迎えたボクは、あれこれ考えたせいで若干寝不足気味だったけどひとまず起き上がる。
休んだら話を聞くどころではなくなるしね。
両親の前では何でもない風を装いながら家を出る。
数分もすれば初霜家が見えてきた。
すると、玄関の前で既に芹が立っており、なんだかソワソワとしている。
「おはよう芹。今日は早いんだね」
「あ、おはよう明日葉ちゃん。ちょっと早起きしたから待ってたんだよ」
２人で肩を並べて歩き出す。
さて昨日のことをどう切り出そうかと考えていたら、芹が先陣を切った。
「……あ、あのね、明日葉ちゃん」
「！　う、うん」
来たか、と身構える。
何かボクの体に異変が起きてるらしいことから、早いうちに芹達から話を聞いておく必要がある。
正直若干ビビってる感は否めない。
この気持ちは病院で病気の診断結果を聞くのと似ているな。
しかし、芹は首をボクと逆側に向けてしまった。
「あ、えっと、やっぱり何でもない」
「え!?」
嘘でしょ。
絶対昨日の出来事を振り返る流れだったじゃん。
確かに昨日は危うく触手に○されるところだったから、できれば記憶の彼方に永久に封印しておきたいところなんだけど、四の五の言ってる場合じゃない。
何故か芹はそっぽを向いて頬を赤らめてる……ってまさか。

「ボク、もしかして死ぬ……!?」
ひょっとして、ボクは思ったより深刻な状況にあるんじゃないかと思い、ガクブルしてしまう。
齢１６歳でこの世を去ることになるのか……。
しかし、芹は慌てて首を振る。
「違うよ!? 死ぬわけじゃないから！」
「……ホント？」
「うん。わたし、明日葉ちゃんには嘘はつかないよ」
それを聞いてちょっと安心した。
せっかくの二度目の人生なんだから今回は頑張りたいと思ってたし、このままあっけなく死ぬのは嫌だと思っていた。
「そっか……。いや二日連続で身の危険を感じる現場に遭遇したから過敏になってるのかも」
「それはしょうがないよ。わたしも魔法少女になりたての頃はそうだったもん」
昨日は恐ろしい魔法を披露した芹だったけれど、そんな彼女でも初心者の時があったのは当然と言えるだろう。
でもすごい才能があるみたいだし、その力で数々の修羅場を潜り抜けてきたと思うと、正に歴戦錬磨と言えるのかもしれない。
「ところで、なんでそんなに言いにくそうなの？ ボクに何か起きてるのは分かるけど……」
ボクの質問に対し、芹は更に頬を紅潮させる。
「え、えっとね、その、外じゃあまり……そうだ！ 学校が終わったらわたしの家に一緒に来てくれないかな？ そこなら誰にも聞かれないし！」
「魔法のことだから外じゃ話せないってこと？」
「う、うん。そう思ってくれても良いよ」
歯切れの悪さが気になったけど、芹の言うことなら素直に従おう。
……なんか嫌な予感がするのは気のせいだろうか？ いや気のせいだろう。うん。
自分に言い聞かせながら学校の敷地をまたいだ。

教室に入ったボクは、気持ちを切り替えてクラスメイトに向かって挨拶をしていく。
「みんなおっはよー」
皆こちらを一斉に振り向いた。
「おはよー」
「おいっすー」
「おー岸波じゃん」
「あす×せりマジ尊い……。この学校に来てよかった……」
若干おかしな人もいたが、概ね良好な返事が返ってくる。
これこそがボクが16年間努力してきた積み重ねの結果だ。
前世では陰キャ中の陰キャだったボクは、今回こそはと明るく振る舞うようにした。
たくさん笑顔の練習をして、見た目を整え、話し方を勉強し、その甲斐もあって前世とはくらべものにならないほど充実した日々を送れている
ボクが変わることのできた転換期はいくつかあったけれど、芹ももちろんその中の1人だ。
ボクは芹がいなかったらどうなってたのだろうか？
今更そんなこと言っても遅いんだけど、多分こんなに明るい性格にはならなかったのかもしれない。
一通りの人に声を掛け終えると自分の席に着く。
そして最後に、隣に座った男の子へ挨拶をした。
「おはよ、俊輔（しゅんすけ）」
「おう」
金髪のイケメンこと、七尾俊輔（ななおしゅんすけ）。
彼とも結構古くからの――下手すれば芹に出会った頃からの知り合いで、ボクが自分を『ボク』と呼ぶようになったのは彼がきっかけである。
今回はたまたま隣になったけど、中学生の頃はずっと別クラスだったから久しく喋ってなかった。
「今日は早いんだね」

「たまたま早起きしたからな。岸波はいっつもこのくらいなのか？」
「そだよー。芹が寝坊助だから、早めに出ないといつまでたっても学校行けないし」
その芹を見てみると、自分の席に着いてクラスメイトの女の子達と喋っている。
彼女はこの学校で人気者だから勝手に輪ができてしまうのだ。
「ああ、そういや今日学（まなぶ）達と駅前に遊びに行く予定なんだけど岸波も行く？　初霜と一緒にさ」
「芹と？」
今日は魔法の件があるし、行くことはできない。
他の子達を誘ってもらうことにしよう。
「……ごめんね。ちょっと芹の家で大事な話あるから今日は行けないんだ。ボク達じゃなくても大丈夫でしょ？」
俊輔は露骨に不満そうな顔になった。
「えーまあ良いけどよ。この前も行けないって話だったじゃん」
うぐっ。
そういえばそうだった。その日もたまたま用事が重なってしまい断ったのを思い出す。
でも今日はしょうがないのだ。
下手すればボクの今後に係わることだし、絶対に外せない用事なのである。
「ホントごめんね」
「別に良いけどよ。俺の方も急だったし」
「今度埋め合わせするからさ」
「おう。……それにしてもお前と初霜いっつも一緒だよな」
「え、うん。まあ、親友だし？」
俊輔の意図が読めない発言に若干戸惑いながら返すと、彼は「ふーん」と相槌を打った。
「まさか、付き合ってる訳じゃないよな？」
「は？」
俊輔は何気なしに放った言葉に、思わず素で返してしまった。

「だってさ、お前ら距離近すぎるし初霜はお前にべったりくっついてるじゃん」
「そ、そう？　いや、だとしても付き合ってるは意味分からないからね!?　ボク達女の子だよ？　そんなアブノーマルなことある訳ないじゃん……」
実のところ心は男なんだけど、とは言わないが。
で、なんでボクと芹が付き合う付き合わないの話になってんの？
「悪い悪い。冗談だからそうカッカするなよ。ちょっと気になってただけだし」
そう言って俊輔は飯野のところに向かってしまった。
なんか、要領を得ないまま話が終わった。
そりゃあ確かに傍から見たらボク達は仲良すぎに見えるかもしれないけど……。
いや、考え過ぎか。そもそも芹がボクのことをそういう目で見ているはずがない。
フゥと息を吐きながら気持ちを切り替えて、授業の準備でもしておこう。

……俊輔と会話している間、芹がこちらを見ていたのをボクは知らないまま。

□

放課後になり、芹と共にボクは帰路に着いていた。
実を言うと芹の家にお邪魔するのは結構久しぶりかもしれない。
中学3年生の時は受検で忙しかったし、その前も、芹は魔法のことがあったからあまり人を呼びたくなかったのだろうと思っている。
他愛ない話をしていたらすぐに初霜家に到着した。
「さ、上がって上がって」
「お邪魔しまーす」
扉を開けると、玄関にはいつもはある靴が見当たらなかった。

「あれ、今日おばさんいないの？」
「うん。自治会の会合があるって言ってよ」
「そうなんだ。珍しいなって思ったからさ」
「家のことあってあんまり行けないからね。でもちょうど良かった」
ちょうど良かったとはどういう意味だろうか。
魔法のことを話すんだから、聞かれる心配をしなくて良いということだと解釈しておこう。
「そういえばディナは？」
「今は妖精圏に行ってるの。ちょっと訳があってね……」
「ふーん」
そういえば昨日もそんなこと言っていた気がする。
ボクのことかもしれないし、そうではないのかもしれない。そこら辺は芹の方が詳しいだろうし、彼女1人でも大丈夫だと感じたのなら、その判断に委ねよう。
「こっちこっち」
先に廊下に上がった芹に手招きされて、ウサギのスリッパを履いて二階へと上がる。久しぶりの芹の家の匂いだ。
廊下を渡った突き当たりの部屋に入っていく。
白をベースとした壁紙に、綺麗にバランス良く配置された家具達。それだけで芹の気質がよくわかる。
ベッドに座るように促されたので、淡いピンクの毛布に腰掛けた。
「何か飲み物持ってこよっか」
「平気だよ。それよりもボクの体に一体何が起きてるの？」
何も知らされてないものだから、それはもう不安でしょうがなかった。
何故かボクにも魔力があって、それが原因で昨日は大変な目にあったってことは分かる。
それ以上は芹とディナに聞くしかない。
「あ、そうだよね。んーと……」
芹は若干言いにくそうだったけど、ポツポツと話し始める。
「実(じつ)は明日葉ちゃんが見たっていうマナの実の在り処が分かったの」

「え、ホント!? それなら一件落着じゃない？」
夜な夜な近所に怪物が現れる心配もしなくて良いということか。
「うん……」
しかし、芹の表情はどこか暗い。
決して朗報という雰囲気ではなかった。
「……えっと、ちなみにマナの実はどこに？」
恐る恐る居所を聞けば、芹は無言のまま腕を上げてとある場所を指差した。
それにつられて視線を下げる。
その指先が指し示すのは……ボクの胸元だった。
「……マジ？」
「オオマジだよ」
「ど、どういうことなの……？」
パニックになりそうになるのを必死に抑えながら、芹にその先を促す。
彼女は「ディナから聞いたことだけど」と付け加えながら話を続けた。
「一昨日まで明日葉ちゃんには魔力は無かったんだよ。それはディナが証明してくれてる。でも昨日の夕方に急に魔法を使えちゃったんでしょ？」
「多分ってだけだけど……」
「大気中にはマナが満ちてて、それを取り込める能力を持つ人に魔力が宿るの。それは先天的なもので後天的に魔力が宿すことはできないんだって」
「つまり、本来ならボクが魔力を持ってるのはあり得ないの？」
芹は前を向いて頷いた。
「そう。でも1つだけ例外があって、マナを放出する物質を取り込んだ場合、その人に魔力があるって誤認する場合があるの」
「……んじゃそのマナを放出する物質っていうのが、マナの実だってこと……？」
「うん……。明日葉ちゃんは果実に触れたら消えたって言ってたよね

？　わたし達は明日葉ちゃんが最初触ると同時に果実の中の魔力が飛び出してどこかに行っちゃったんだと思ってた。でもそうじゃなくて、触ると同時に明日葉ちゃんの中に取り込まれて、その衝撃で明日葉ちゃんは幽界に飛ばされたんだと思うの」
「そ、そういうことかー……」
　力が抜けたボクはベッドの上で後ろに倒れこむ。
　弾力のあるマットが衝撃で軋み、僅かに上半身が浮いた。
　ボクが天井を見やったまま、芹は話を続ける。
「ディナが最初に明日葉ちゃんの体を計測した時には、まだ果実の中のマナが明日葉ちゃんに馴染んで無かったんだと思う。でも1日経って段々とマナが魔力として蓄積されていって、魔法が偶然使えちゃったんじゃないかな……？」
「それでまた幽界に行くことになっちゃって訳ね」
「魔物ってね、純度の高いマナが好物なんだって。それでマナの実を積極的に狙うんだけど、明日葉ちゃんの中の果実にも反応しちゃったんだね」
「……なるほど」
　なんてこった。
　自分の体が原因だったなんて。
　軽率にあの黄金の果実を手に取ったのがそもそもの間違いだったのか……。
　思えばおかしいところは確かにあった。
　幽界に入った途端襲ってきたスライム。芹の方が近かったのにこちらに向かってきた触手。
　ぜーんぶボクの中の果実に釣られてきたのだろう。
「んじゃあさ、ボクはどうすればいいの？　もしかしてこのまま一生魔物に襲われることになるの……？」
「そんなことはさせないよ。ちゃんと明日葉ちゃんを助ける方法もディナから聞いておいたから！」
　芹は横たわったままのボクの手をガッチリと掴んだ。
「ホント!?　良かったぁ……。このまま一生魔力を持って生きてくこ

とになると思ったよ」
妖精であるディナがそう言うのなら間違いないのだろう。
早速マナの実を摘出してもらおう。
「それで、一体どうすれば取り出せるの？　ボク何でもやっちゃうよ」
「何でも……。うん、そうだね。ちょっと恥ずかしいけど頑張ろうね」
「大丈夫。芹のこと信じてるから」
「ありがとう明日葉ちゃん！　――じゃあセッ○○しよっか」
「……ん？」
今、芹の口からとんでもない言葉が出てこなかった？
「え、ごめんもう一回言ってもらえる？」
「だから、セッ○○だよぉ。　何回もセッ○○って言うの恥ずかしいんだからね……！」
「十分だよ！　十分言ってるから！　え、なに、なんで!?」
聞き間違いではなかった。
心なしか、こちらの手を掴む芹の力が強まった気がする。
「聞かないで！　明日葉ちゃん『何でもする』って言ったじゃない！」
「限度があるだろぉ!?」
芹はボクの手を離して、素早くこちらの正面に回り込み肩を掴んできた。まるでボクが逃げ出すのを防ぐかのように。
そうして片手で器用にボクの制服のボタンを1つずつ外していく。
「ちょ、ちょっと。何してるの!?」
「なにって……服脱がないとセッ○○できないよ？　あ、もしかして服を着たままの方が良かった？　明日葉ちゃんがそう言うのなら……」
「そんなマニアックなプレイ求めてないよ！　とりあえず手を離し……力つよぉ!?」
全然脱出できない。
力を入れてる割に痛くはないが、このままでは逃げることは不可能だ。
どこでこんな技覚えたの??
いやそんなこと考えてる場合ではない。

このままではボクは芹に初めてを奪われることになるのだから。
初めての相手が親友になったら、ボクは今後彼女をどういう目で見れば良いのだろう。
話を聞くために一旦冷静になってもらう他無い。
「と、とりあえず落ち着こ？　まずは話し合ってからでも……」
「そんなこと言ってる場合じゃないの！　安心して明日葉ちゃん。何も怖いことないからね！」
「そんな血走った目で迫られて怖くないは無理があるでしょ！」
「大丈夫！　こう見えてわたし、初めての人には優しくする自信があるの！」
「それでボクは何を安心すれば良いの!?」
「明日葉ちゃんが天井の染み数えてる間に終わらせるから！」
「それ女の子が言っちゃいけないやつー!!」
必死の抵抗も虚しく、芹の腕の中から中々脱出できない。
その間も芹の顔が徐々に近付いてくる。
くそぅ、諦めるしかないのか……。
観念して目を閉じようとした時、部屋のドアがガチャリと開く音がした。
「ふう、ようやく帰ってこれタ――って、ん？」
「……」
「……」
入ってきたのはディナであった。
ボク達を見て何かを察した表情を、してるような気がする。
「……えっと、お取り込み中だったかナ？　ワタシは退散するからごゆっくり」
「いや待って！　ボクと芹を2人きりにしないで！」
出て行こうとする彼（？）を何とか引き止める。
これ以降チャンスはないだろう。
ディナはこちらに振り向いて聞く体勢に入ってくれた。
「何があったんだイ？」
「いや、芹が急に……。ほら、芹。ディナに事情を説明して？」

「……うん分かった」
芹はボクの体から手をどけて上半身を起こした。
ボクは制服を整えながら、彼女の話をディナと一緒に聞くことに。
要約すれば、魔力を持つ者同士が一定以上の距離による接触を行うと、片方の魔力をもう片方が操作できるようになるらしい。
それによりボクの中の魔力を操作してマナの実を体外に排出しようとしたということだ。
んで、『一定以上の距離による接触』というのが所謂性交であり、これが芹がボクに迫ってきた理由である。
本当に驚いた。
急に芹が発情して襲い掛かって来るのかと思ったもん……。
全てを説明し終えた芹の顔は真っ赤だ。
そりゃあ自分の行為の説明を具体的にするなんて羞恥プレイ以外のなにものでもない。
でも芹はボクの為に行動を起こそうとしてくれたんだよね……。
それなのに拒絶しようとしたのは彼女に悪かったかもしれない。
ディナはなるほどと言った様子で頷いた。
「事情は分かっタ。でもワタシが戻ってからって話したよネ？」
「うぅ～だってだって！　明日葉ちゃんが心配だったんだもん……」
「まあ気持ちは分かるがネ。ただ芹にとってもあまりよくない話なんだが……君達が交わってもマナの実は取り出せないヨ」
「「え？」」
芹とボクの声が重なる。
じゃあさっきの話は一体何だったの？
ディナは話を続けた。
「他人の魔力をコントロールするにはもう片方が異性でないといけないんダ」
「え……つまり、ボクは男とセ……性交しないといけないってこと？」
「もっと言えば女性器の中に男性器を入れることで、パスがつながって魔力が混ざり合うからこそ魔力を操作できるようになるんだ」
ガーンという衝撃がボクの頭を横切っていく。

ボクは、自分の命を守るためにどこの誰とも知らない男とヤらなきゃいけない、と……。
え、普通に嫌なんだけど。
「他に方法はないの!?」
「うーん、ワタシも妖精圏に確認しに行ったけど、これ以外に方法は存在しないらしい」
「そんなあ……」
ガックシと首を落とす。
「まあ、そもそも男の魔法使いが存在するのか、ワタシは認知してないんだけどネ」
「え、どゆこと?」
「ワタシ達は自分と魔力の波長が合う人間のところに向かって契約を行い、そしてその人間は魔法を使えるようになるんだけど、自分と契約できる人間の魔力しか遠くからは感知できないんダ。だから他にどんな人達が魔力を持っているのかは、一目見るだけじゃ分からないんだよネ」
「え、じゃあ他の魔法使いを見つけるのも一苦労ってこと……?」
「そうなるね」
マナの実をボクの体から取り出す為に男の魔法使いが必要で、しかもそういう人間がこの世界にいるとも限らない。
そんなの探しようがないじゃないか。
「芹とディナはそういう人を見かけたことは無いの?」
「ワタシ達は男で魔法使いをやってるのは見たことないヨ。いるのかもしれないが、少なくともこの街とその近辺には存在しない」
これ詰んでない?
このままだと魔物に一生追われる羽目になるんだけど。
「な、なんとかならないの?」
「そうだねえ。どうにか魔法使いを見つけるしか――って芹? さっきからずっと黙ってるけド」
そういえば話してるのはボクとディナだけで、芹が会話に入ってくることはなかった。

横にいる彼女を見ると、目を床に向けている。
長い髪が一緒に垂れているせいで、その表情は読み取れない。
「……やだ」
「え？」
芹の顔を覗きんでいたら急に顔を上げた。
「ぜ～～ったいにやだ！　明日葉ちゃんが男の人とセッ○○するなんてありえないよ！」
突然の大声にビックリして転げそうになるが、何とかこらえる。
「明日葉ちゃんに男の人は近付けさせないからね！　他の方法考えようよ！」
「いや、本人の意思はもちろん尊重するけど、結局は性交が一番手っ取くはあるんだヨ？」
「やだやだ！　明日葉ちゃんを男に取られるくらいなら一生このままでいい！」
ボクだってそんなことはしたくない。
かと言ってこのまま現状維持という選択肢も取れない。
また幽界に飛ばされる可能性がある限り、不安でおちおち睡眠も取れない体になってしまう。
だからこそ最善策を魔法に成通している2人に考えてほしいんだけど……。
そんなことを考えていたボクだけど、次の芹の言葉に思考が停止してしまった。
「明日葉ちゃんのこと一番好きなのはわたしだもん！　誰だからと言って絶対に許さないよ！」

07：次の一歩

ぼんやりとした頭を抱えながら初霜家から帰ってきたボクは、湯船に浸かりながら天井を仰ぐ。
ぬるめのお湯に体を浸(ひた)しながら視線を戻し、今度は下を向く。
高校生になっても一向に成長しない胸をモニモニ掴みながらボヤいた。
「なんてこった……」
それ以外の言葉が浮かんでこない。
原因は夕方の芹の発言。
思い出すだけで顔が真っ赤になってくる。
『明日葉ちゃんのこと一番好きなのはわたしだもん！　誰だからと言って絶対に許さないよ！』
その言葉に一度思考が停止したボクだったが、なんとか即座に再起動して彼女に問いかけた。
『す、すき、って……』
『え？　……あ』
芹はハッと我に返り、ボクから目をそらした。
それだけで、芹がどういう意味で「好き」と発したのか察してしまう。
『『……』』
お互い無言になって、静寂で包み込まれた部屋の中でどう動けばいいか分からなくなっていた。
このままでは何も始まらないと思い、どうにか声を絞り上げるボク。
『好きって、友達として……？』
『……恋愛的な意味で、だよ』
自分の願望も入った問いかけであったけれど、芹の回答によって見事に打ち砕かれた。
再び無言になるボク達。
それを見かねてディナが提案を出してくれた。

『……ふーむ、話し合いの雰囲気ではなくなってしまったネ。今日はこれでお開きにした方が良いんじゃないかナ？　明日葉も、魔法さえ使わなければきっと大丈夫だから。もし幽界に迷い込むことになってもこれを持ってれば大丈夫サ』

そう言ってディナはボクにある物を手渡した。

透明な石のようなもので、手の上に置かれると密かに温かい。

『これは？』

『魔結晶と呼ばれるものでね。明日葉が別世界に転移した時に魔力反応があった場合、ワタシが持っている方の結晶に通知が来る仕組みなんだ。今日のところはこれを身に着けていてくれ』

要は偶然かうっかりで幽界に行ってしまったら、ディナと芹が助けに来てくれるということなんだろう。

何から何まで申し訳ない。

一先ずこれ以上伝えてくることが無いようなので、ボクはベッドから腰を上げた。

『……じゃあ、ボクはこの辺で』

『あ、送るよ？』

芹がボクに着いてきそうになったけど、何を話せば良いか分からなくなりそうで、やんわりと制止することにした。

『大丈夫。そう心配なことも起きないだろうし、何かあったらディナに連絡が行くでしょ？』

『……そ、そっか』

『また明日も会えるからさ。その時お話しよ？』

『分かった……。また明日ね』

『うん。バイバイ』

部屋の中でお別れしたボクは、そのまま振り返ることなく芹の家を出た。

マナの実のことなど一切頭から抜け落ちたまま、自分の家に帰ってきて今に至る。

「なんてこった……」

同じ言葉を再度ぼやく。

しかしそんなことをしたって何も変わらない。
ボクにできることといえば、どうしてこうなってしまったのか考えるくらいか。
分かっているのは芹はボクに告白まがいのことをしてきたということ。
しかも反応を見る限りガチのやつ。
「好き、か……」
口に出してみる。
それによって何か変わるかも、と思ったがそんなことは全然なかった。
だって、ボクは人を好きになったことも、好かれたこともないのだから。

前世でボクは絶えず1人だった。
両親のいないボクを、周りの人達全員が遠ざけたのだ。
それはもうボッチもボッチで、でもボクはなんでか強がっちゃって、「好きで1人でいるんだ」という態度を崩さなかった。
それがボクの孤独っぷりを加速させていって、結局学校生活の中で友達は1人もおらず、取り柄といえば勉強ばかり。
そんな中でも、1人くらいは手を差し伸べてくれる人が現れるだろうという妄想が日課となっていた。
ボクは本心では癒やしてくれる隣人を求めていたのだ。
でも素直になれないボクが周りに相談できる筈もなく、社会人になってもボッチのままだった。
結局、自分が動かなければ周りは手を差し伸べてくれないと分かったのは、死ぬ間際になってからのこと。
人間、行くとこまで行かないと自分を省みないと言うのはいつの時代でも変わらない。
「来世があればもっとうまくやりたいな」と思いながら孤独死を迎えたボクであったが、まさか本当に来世があるとは……。
前世のトラウマもあってか、ボクは今度はと友達作りに尽力した。

今回は両親がいてくれたし、同性代の子供に会う機会には恵まれていたから、それはもう頑張った。
おかげで親友もできたし、ボクの努力は報われたのだろう。
その親友から好意を向けられているとは思わなかったけどね！
でも孤独を絶えず嫌悪していたことでここまで来れたとはいえ、15歳になっても『好き』の意味はわからなかった。
いやまあ、世間一般的な『好き』はなんとなく分かるよ？
要は男と女が惹かれ合う的なことを言うんだろうけど、それがどうにもピンとこない。
ボクが特殊なせいもあるのかも。
体は女だけど、心は男の部分も無くはない。
今でも女の子の裸に若干緊張するのがその証拠だろう。
肉体的には、男の人と付き合ったり結婚したりするのが無難なんだろうけど、それに不快感を持つ自分がいる。
かといって女同士で恋愛をする？　それは世間一般的な常識から外れることに……。
どっちも駄目じゃん……。
独り身でいるというのも手だろうが、それはつまり一生を孤独に過ごさないといけない訳で、トラウマが蘇ってくる。
――もう独りは嫌だ。前世のボクには戻りたくない。
その想いでここまで来たのに、戻ったら全てが水の泡になる。
なんだかいよいよがんじがらめになってしまった。
このままではのぼせてしまうので、早急に風呂場から退出することに。
両親と夕食を食べ、自室で1人考えても結局結論が出ることはなかった。

□

あれからウンウンと考えてたらあまり眠れずに朝を迎えてしまった。

なんだか最近ずっと寝不足気味な気がする。
それでも割りと元気なのは若い証拠ということだろう。
このまま体調不良ということで休むのも手なのだろうが、そうすると一つ問題が残る。
男女の恋愛についてはもういい。ボクがボクである以上、永遠に答えは見つからない気がするからだ。
そんなことよりもボクは、芹に対してどう返事をすれば良いのだろう。
芹とは親友同士だと思ってた。これまでもずっと一緒だったし、これからも裏切られることのない関係が続くだろうと信じて疑っていなかった。
そこで芹の告白紛いの発言である。
芹のことは大事だし、できれば変わらずにいたいと思うのはボクの我儘だろうか。
でも現実はそう上手くは行かず、ボクは選択肢を2つから選ばなければいけない。
即ち芹を振って彼女を傷つけるか、芹を受け入れて恋人になるか。
前者はちょっと選びたくない。
芹の告白を断れば、絶対にギクシャクとした関係になる。
それはもう元の仲良しには戻れないだろう。
かと言って恋人同士になると言うのも……。
現時点でボクには芹を『好き』という感情は持てない。
それなのに、彼女を受け入れればボクは彼女を騙すことになる。
昨日は何とか防げたけど、いつかはキスをしたり『そういうこと』もしなきゃいけないだろう。
その時に、ボクは彼女を受け入れることができるのだろうか？
ひょっとしたら、それが芹を一番傷つけるのかもしれない。
「……これ、割りと詰んでない？」
家を出て外を歩きながら独り言を呟いた。
嫌と言っても芹の家はどんどん近付いており、もう玄関前まで来てしまっている。

意を決してインターホンを鳴らそうとしたのだが、先に扉がガチャリと開いた。
そこには芹が身を乗り出して立っている。
「せ、芹……？」
「おはよう明日葉ちゃん……！」
「どうしたのせり、急に飛び出して……って明日葉ちゃんじゃない」
「あ、どうもおばさま」
肩で息をする芹を挟んで、とりあえず彼女の母親に挨拶した。
その母親は自分の娘のことを不思議そうな目で見ている。
「一体どうしたのかと思ったわ。チャイムも鳴ってないのに急に椅子から立ち上がるし」
母親の言葉に、芹はギクリというのがピッタリな表情になる。
「え、えっと、ほら、いっつもこれくらいに明日葉ちゃん来るのかなって思って……。わたしも高校生だし、そろそろしっかりしないと！」
「あんた、今日の朝『まだ起きたくなーい……』って寝返り打ってたのにどういう風の吹き回しなの？」
「うっ……と、とにかく明日葉ちゃん来てるから！　お母さん行ってきます！」
母親の返事を待たないまま、芹はボクの体をグイグイと押して玄関を閉める。
敷地から道路に出るまで芹は無言だったが、こちらにぎこちない笑みを向けてきた。
「明日葉ちゃん！　今日はとってもいい天気だね！」
「思いっきり曇り空だけど……」
「……あ」
芹は今初めて上空の状態に気が付いたように声を上げる。
「い、いやあ冗談だよぉ！　初霜ジョークぅ……」
「芹、そんなキャラじゃないよね……」
「……ハイ」
力ない返事をした後、芹はうなだれてしまった。
歩みは止めないが、お互いの間に会話が無い時間が続く。

めっちゃ気まずい。
昨日の今日だからしょうがないんだけど、芹がめちゃめちゃ緊張してるというのがよくわかった。
でもこのままという訳にはいかない。
「芹はさ、なんでボクのことが好きなの？」
「え……」
彼女はこちらに驚いたような表情を向けてきた。
いきなり不躾だっただろうか。とはいえ自然と口を出てしまったのだからしょうがない。
本当は断るつもりだった。
断った上で「芹のことは大事だよ。だからこれからも一生にいよう」と言おうかと思っていたのだ。
それが一番無難な回答ではないだろうか？
身勝手かもしれないが、芹のショックを一番少なく抑えるのにはこれしかない、筈だった。
でもそれは逃げだ。
ボクが勝手にそれが一番だと決めつけているだけなのだろう。
芹の悲しむ顔は見たくない。芹の悩む姿は見たくない。
芹が本心をさらけ出したのなら、ボクもそれ相応に悩むべきだ。
彼女は考える素振りをしていて、やがて結論が出たみたい。
「うーん……ずっと明日葉ちゃんを見てきたからなんだけどね。何にでも全力で、わたしの見てないところでも人助けとかしてるの知ってるし、みんなから好かれようと努力してるよね。そんないつも頑張ってる明日葉ちゃんの支えとか癒やしになれればな、って最近考えるようになったの。それでわたしは明日葉ちゃんのこと好きなんだなって思えて」
「それが、『好き』ってこと？」
ボクのボンヤリとした恋愛の概念とはずいぶん違うみたいだった。
その人の為に何かしてあげたいっていうのも、それもまた『好き』ってことなのかな。
なんだか勉強になるなあ。

ボクなんかよりも芹の方がずっと大人なんじゃないだろうか。
「話してくれてありがとう」
「明日葉ちゃんのこと悩ませちゃってるよね……？」
「うーん、悩んでるといえば悩んでる、かなあ」
ボクは一拍置いてから答える。
「親友からの告白で悩まない人いないと思うし」
「うぐっ」
芹は下を向いてしまった。
多分彼女も同じこと考えていたのだろう。
友達から恋人になるのはままあるけど、相手に断られたらそりゃあ気まずい。
下手すれば二度と元の関係に戻れない可能性だってあり得る。
「でも芹はそれ込みで気持ちを打ち明けてくれたんでしょ？」
「う～、違うの……。本当はもっとちゃんとした場で言うつもりだったの……。でも明日葉ちゃんが他の男の人に取られたらって思ったら勝手に口を出ちゃって……」
「ああ、それねぇ……」
ディナが言うには、ボクが元の体に戻るには男の魔法使いと性交しなきゃいけないらしい。
誰が好き好んで知らない人間と致したいと思うのだろうか。
「ボクもそれは嫌だし、何か別の方法あれば良いんだけどね」
「でしょでしょ？　だったらわたしと付き合ってからでも――」
「いや、それとこれとは話が別じゃない……？」
「うぐぅ……」
芹が露骨に落ち込んでしまった。
しかし彼女の言いたいこともわかる。
もしボクが逆の立場だったとして、同じようなことを思うだろうからだ。
それに芹に魅力を感じていないわけでもない。
とびっきりの美人だし、それでいて優しくて親切だし、ボクの学校の中で彼女にしたいランキングでは間違いなく上位に入っているこ

とだろう。ボクのひいき目を抜きにしても
「やっぱり、わたしが女だから駄目なのかな？」
「え。うーん、どうだろう」
女同士だと駄目というのは個人の感想とは関係ないから無しだとしても、ボクは女の子と付き合えるのだろうか？
……ちょっと考えてみて、男と付き合うよりは、まあマシなのかもしれない。
ただボクの中でそういう感情がまだ芽生えていないだけで。
正直に言えば彼女といる時間は楽しいと思っている。
彼女が居なかった時の日常をあまり思い出せないくらいには。
「……ひょっとして、全くの脈なしでも無さそう？」
「それは……ボクが芹をそういう目で見てないってだけで……」
「そっか……。えへへ、そっかあ」
なんだか芹が嬉しそう。
さっきまでの暗い態度が吹き飛んでしまった感じだ。
「ねえ明日葉ちゃん」
「ん？」
並んで歩いていた芹が、急にボクの前に回り込んで足を止めた。
「わたしにチャンスをくれないかな？」
「チャンス？」
「そう！」
芹は素晴らしい方法を思いついたと言わんばかりに満面の笑みを浮かべている。
「わたしが明日葉ちゃんを恋人になっても良いよってくらい意識させるように努力するから、その時になったらわたしと付き合ってくれないかな？」
「え……？」
まるでそんな発想はなかったからビックリしてしまった。
芹のことを女として見るってできるのだろうか？
「ボクがその間に恋人を作っちゃったらどうするの？」
「その時はすっぱり諦めるよ。明日葉ちゃんのことを血涙流しながら

影から見てることにする！」
「全然諦められてない!?」
横槍入れられたら辛いってのはなんとなく分かるけど……。
まあ芹が元気になってくれて良かった。
彼女が落ち込んだままだとボクも辛い。
それに、きっと彼女なりに一杯悩んだのだろう。
同性同士での恋愛についてだとか、ボクが嫌な気持ちにならないかだとか。
それを考えると、ただ断ってしまうってのも何だかやりづらい気がする。
付き合うという選択肢はまだ取れないが、芹がどんなことをしてくるのかちょっと興味がある。
今までと同じ通りのままなのか、それとも全く予想できないことを仕掛けてくるのか。
しばらくは様子見ということで、スキップでもしそうな勢いの芹と共に坂道を登っていった。

―――――――――――――――

明日葉と芹が通った道の後方、その上空の空間が歪む。
すると何も無い空間から1人の少女とぬいぐるみのようなものが現れた。
「全く、こんな朝から勘弁してほしいものだね」
「それはワタシの責任ではないしね～」
「これでマナの実は何個集まったのだっけ？」
「クフッ、3個も集まったよ」
少女の方が「ふむ」と顎に手を当てた。
「世界の危機だと聞いていたが意外と何ともなさそうかな？」
「幽界ならマナの実を目当てに魔物が湧いてくるから楽だけど、現界の方は苦労しそうだね～。まあ一旦探索は中止としよう。また夕方からでも動き出せば良い」
「なら折角近くまで来たのだし『彼女』の様子でも……」

「それは止めといた方が良いんじゃないかな～」
「むっ、流石に怪しまれるか……。もう2週間も『彼女』と会ってないから調子が出てこないんだがね」
「知り合いに会わないだけで体調が変化するなんて、人間は変わってるよね～。君は他よりも特別な地位にいるから尚更かな？」
「特別というのは『彼女』のような存在を言うんだ。私は平凡な人間さ」
　少女の言葉に人形は「クフフ」と笑う。
「そういう控えめさも持ち合わせているのが君の人徳なのかもね。――それにしても、君がマナの実の回収に乗り気になってくれるとは。ひょっとしたら静観するんじゃないかと思ってたよ」
「私も一応正義感というものは持ってる。全世界の生物が死ぬかもしれないと言うのなら黙ってられないさ」
「マナの実を全部集めた時の効力に食いついてたような気がするけど？」
「……本当に私が願いを叶えても良いんだね？」
「クフッ、も～ちろんもちろん。ワタシとしては君が願いを叶えた後に貰えればそれで良いし～」
「……ふむ。これで『彼女』が私だけのものになるのかもしれないのか。俄然やる気が出てきた」
「そうそう。君がその気になれば誰にも負けやしない。最後に勝つのはワタシ達――『天使』だよ」

０８：新たな魔法少女

放課後、ボクは再び芹の家にお邪魔していた。
今度はディナも最初から居る。
議題はもちろん『どうやってボクの体からマナの実を取り出すか』だ。
それともう1つ話すことがあるとディナは言った。
「ボクの中の果実の処遇？」
ディナはコクリと頷く。
「マナの実は人間が使う言葉で言うところの、『国宝』と呼ばれるものに等しい。そんなものが無くなったから妖精圏では大騒ぎ。しかもその1つが人間の体内にあると聞いて上層部は大層混乱していタ。中には明日葉を妖精圏に連れてきて永遠に封印すべきだと主張する者もいたヨ」
「え……」
「そんなの駄目だよ！」
ボクが驚き、芹も抗議の声を上げる。
「もちろんワタシもその意見には反対した。明日葉は巻き込まれただけで故意にやった訳じゃない。それに、ワタシ達から現界への必要以上の干渉は避けなければならないしネ」
ディナの言葉にホッとする。
冤罪で逮捕なんてされたくはない。
「そうだよね。もしそんなことが起きてもわたしが明日葉ちゃんを守ってあげるから！」
「うん、ありがとう。芹」
手をギュッと握ってくる芹に対して、ボクはその手を握り返した。
ディナはそんなボク達を交互に見やる。
「君たち、ワタシがいない間に何かあったのかイ？」
「え？」
「昨日は気まずい雰囲気だったのに、もう戻っているというカ」
「うんまあ。仲直り、ってのが合ってるのか分からないけどうまい着

地どころは見つけたよ」
「そう！　わたしが明日葉ちゃんの心を射止められたら付き合うことにしたの！」
　芹はボクに抱き着いてきた。
　まだ付き合ってる訳じゃないんだから、そういう過度なボディタッチは止めていただきたい。
　めっちゃいい匂いもするし。
　……ってこれじゃあ変態みたいじゃないか。
　芹をさりげなく剥がす。
　彼女は残念そうな顔をしたが、やるならもっと後にしてほしい。
　そんなにちょろい人間じゃないのだ、ボクは。
　ディナはと言うと、「なるほど」と頷いた。
「このままでは芹の魔法の活動にも影響が出そうだったし、仲が良好なのは良いことダ。それで、マナの実を明日葉が持ってることはとりあえずお咎め無しだ。とはいえ全部集めきる頃にはどうにか摘出しておきたい」
　それはそうだろう。
　ボクとしても、このまま妖精の世界の宝物を持っておくのは気持ちのいいものではない。
「それに、ボクの他にもマナの実を見つけた人がいたら同じ状況になるのかもしれないんでしょ？」
「そうだネ。そんな性質は無かった筈なんだが、現に今マナの実を取り込んでしまった人間が目の前にいるし。問題は山積みサ」
「なんか、ごめんね……」
　故意ではないとは言え、ディナと芹の仕事を増やしたような気がして申し訳ない気持ちが芽生えてくる。
　しかしディナは首を横に振った。
「偶然明日葉が最初だっただけで、誰がマナの実を手に取っても同じことだったヨ。現界の人間を守るのがワタシ達の役目だからあまり気に病むこともない」
「そっか……。うん、ありがと。それで、これからどうしよっか？」

彼らとしてもやることは変わらない。
即ち全てのマナの実の回収と、その過程でボクの体内のマナの実を取り出すこと。
どちらも楽な道ではない。
ディナと芹はあーでもないこーでもないと話し合っている。
魔法のことは詳しくないから、ボクはあまり会話の中に参加できない。
ボクにできることってないのかなあ。
それこそ魔法が使えれば――ってあれ？
「あのさ、物は試しなんだけど……」
ボクの言葉に2人は振り向いた。
「一昨日、ボクは魔法が使えたよね？　だったらボクが魔力をコントロールできるようになれば解決するんじゃ」
ディナは「ふーむ」と考える素振りを見せた。
「それは難しいと思うナァ」
「そうなの？」
「うん。魔法とは本来妖精などと契約して初めて使えるようになるんダ。そうすると教えることなく本能的に魔法を理解できる。これが魔法使いになるということなんだけど、明日葉の場合はたまたま間近でリバーサルの魔法を直視してたから、体内の魔力が反応して使えたってだけなんだと思う」
「簡単じゃないんだね……」
良いアイディアだと思ったんだけど、そう上手くはいかないらしい。
でも芹の方から助け舟を出してくれた。
「でも最初から否定するもの良くないんじゃないかな？　明日葉ちゃんはわたし達みたいな魔法使いとは違うんだし、もしかしたら上手く行くかもしれないよ？」
「……なるほド。芹の言う通りかもしれないネ。ちょっと試してみようカ」
「うん、じゃあ幽界の方に飛ぼっか。明日葉ちゃんはわたしに捕まっ

てて ね」
芹に言われるままボクは彼女の制服を掴んだ。
彼女が『リバーサル』と唱えるとグニャリと空間が歪む。
一瞬後にボク達は幽界に来ていた。
別世界の建物とはいえ、初霜家を壊す可能性があるので外に出たボクは芹達の真向かいに立つ。
「それじゃあ明日葉、魔力をコントロールしてみるんダ」
「頑張って、明日葉ちゃん！」
「いやいきなり言われても……」
自分の感覚としては、体の様子に全く変化が無いからコントロールも何もないんだけど。
試しに全身に力を入れてみる。
……駄目だ。筋肉が強張っただけで何か起きる気はしない。
「芹はどうやって魔法を使ってるの？」
こういうのは専門家に聞くのが一番だ。
「わたし？　わたしはね、体の中心に力を入れると全身に魔力が行き渡るの。それからどんな魔法を使いたいかイメージを膨らませながら魔力を杖に集中させると、魔法陣が自動的に描かれて、魔法が撃てるって感じかな」
「なる、ほど……？」
言ってることは何１つ理解できなかったが、言われた通りにやってみよう。
体の中心に力を入れてみる、が、何も起こらない。
鳩尾のあたりを揉んでみても不快感はするだけだった。
「何か出せそうかイ？」
「冷や汗的なものなら……」
これは思ったより上手く行きそうな気がしない。
芹とディナは「うーん」と何かできないものかと考えてくれている。
「杖が必要なのかな？」
「芹のそれは生まれ持っての資質が形になったものだから、明日葉には合わないと思うけど……でもそうだネ。形から入るのは大事かも

ネ」
「じゃあ明日葉ちゃんこれ持ってみて」
芹が自分の手を光らせると、一瞬で赤い宝石が埋め込まれたような杖が現れる。
こちらにやってきた彼女はボクに杖を握らせて、後ろから操演のように腕を軽く掴んでくる。
「今明日葉ちゃんに向けて魔力を発してみてるんだけど、魔力は感じた？」
「何にも……」
「そっかー」
芹は肩に手を当てたり色々試行錯誤しているようだった。
次第に鳩尾に触れたり首元を揉んだり胸を触ったり……ってオイオイ。
「芹」
「あ、バレちゃった？」
確信犯かい。
彼女は舌を出しており、全く反省の色が見られなかった。
「途中からボクの体触るのが目的になってない？」
「だってぇ、明日葉ちゃんいい匂いするんだもん」
「芹ってそんな性格だった？」
おしとやかで誰からも好まれる彼女がセクハラ紛いの行為をしてくるとは……。
「明日葉ちゃんに好きって言っちゃったもん。だったら何も隠す必要ないよね」
「えぇ……。そこは自重してよね……」
こっちとしては溜まったもんじゃない。
「うーん、明日葉ちゃんが言うならそうしよっか」
「ボクが言わなくてもそうして……」
「イチャついているところすまないが、明日葉の方は魔力を感じ取れているかイ？」
ディナがボク達の会話に割り込んでくる。

イチャついてる訳ではないけれど重要なことを確認してるんだからそっちを優先しなきゃね。
芹に離れてもらってからディナに返す。
「ぜっんぜん。魔力が何なのかすら掴めてないよ……」
「そうか。やはり契約してるしてないの差は大きいようだネ。そもそも明日葉には本来魔力は無いのだから契約もできないんだけド」
「そっかあ。あと他の方法としては……魔法を唱えてみることくらい？」
実際、一昨日は魔法を口にしただけで発動してしまったのだから、もう一回同じことができると思うのだ。
「それしかないカ……。何が起こるか分からないから、あまりこの提案はしたくなかったんだけどネ」
ディナの気持ちもよくわかる。
取り返しのつかないことになってしまったらボクも怖い。
でも可能性があるのならやれることはやっておきたい。
「危険がなさそうで明日葉が実際に見てる魔法と言えば……『サーチ』カ。ちょっと声に出してみてくレ」
「分かった。えっと、『サーチ』！」
ボクが叫ぶと、足元に黒紫色の魔法陣が現れた。
本当に使えてしまった。
体の方は全く変化がない。声を発するだけで魔法が使えるなんて何だか変な気分。
「ここからどうすれば良いの？」
「本当ならマナとか魔力を探知する糸を伸ばせるんだけど、明日葉は魔力の扱いができないみたいだし、言葉で動かすというのはどうかナ？」
確かに魔法陣が生まれただけで、特に何かできそうにもなかった。
ディナの言う通りにやってみる。
「じゃあ……一番近くの魔力を持つ人間を探して！」
すると、魔法陣から一本の線が伸びた。
線はグネグネと曲がり、やがてある場所に辿り着く。

そこは芹の足元であった。
「わあ、わたしのところに来たよ」
「成功ダ！　……でもワタシ達が使ってる『サーチ』とは違うみたいだネ」
「え、そうなの？」
初めて見た時とそう変わらない気がするんだけど……。
「普通は自分で糸を伸ばして近くの魔力とマナを発する物質を見つけるんだけど、明日葉のものはどうやら君の命令に従って自動的に追尾してるようダ」
そう言われると順序が逆だ。
普通は魔法を使ってから目的のものを見つけるようだけど、ボクのものは予め目的のものが分かった上でそこに糸がまっすぐ伸びていく感じに見える。
「この差は一体なんだろう……。気がかりではあるが、とにかくこれで明日葉も魔法が使えることが分かっタ。ひょっとしたら自分でマナの実を取り出せるかもしれなイ」
「うん、そうだよね。明日葉ちゃんがこれ以上危険な目に会わなくて済むかも！」
ディナは一抹の不安を覚えてそうだけど、果実を取り出せるのなら何だって良い。
早速試させてもらおう。
「それじゃあ、何の魔法を叫べばいいの？」
「……そういえば、特定のものだけを取り出せる魔法なんてあるのかナ？」
「「え？」」
ボクと芹の声が重なった。
いやいや、特定の場所まで一瞬でたどり着けたりするのに、そんな簡単そうなものがないわけ……。
「え、ないの？」
「うーん……。ワタシも結構長生きだけどそういうのは聞いたこと無いなア」

「中のものをポンッと取り出すだけなのに……!?」
ディナは首を横に振った。
この反応からして本当になさそう。
「そもそも魔法は万能な現象ではないんだヨ。ちゃんとした法則(ルール)があって、魔法は基本的に他の物質に直接的な影響を与えられないのサ」
「芹が使ってる魔法は魔物倒したり、地面に穴開けたりしてるけど……?」
「あれはあくまでも魔法で召喚した光熱をぶつけてるだけなんダ。『ジャンプ』とか『リバーサル』も明日葉が芹に触れていることで初めて機能するしネ」
「そんなあ……」
これじゃあ振り出しに戻っただけじゃん……。
「中のものを取り出すには、やっぱり自分の魔力をコントロールする他なイ。それで明日葉に魔法を使ってもらったんだけド……何か掴めたかい?」
「さっぱりだよぉ……。なんか魔法が勝手に動いてるような気分しかしないし……」
「そうカ……。やっぱり別の方法考える他なさそうだネ」
「そうだよね。魔法のことで明日葉ちゃんが頑張る必要もないと思うよ」
せっかく教えてもらったのに、なんだか申し訳ない気持ちになる。
「魔結晶を渡してることだし明日葉の危機にはすぐに駆け付けられル。今はマナの実の回収を優先するべきかナ」
「うーん。わたしとしては早く明日葉ちゃんを安心させてあげたいけど、しょうがないのかなあ」
「明日葉には注意を払ってもらって我慢してもらおう。マナの実を集めることでひょっとしたら取り出してほしいという願いが叶うかもしれないヨ」
「あ、そっか。でも現界にあるマナの実を回収するのは難しいよね……」

「そこはワタシ達の探知魔法で地道に探すしかないと思う」
早速2人は次の話題に移ってしまった。
もうボクが入り込める余地は無い。
こんなにも手厚くフォローしてもらってるんだから、何か助けになりたいんだけどなあ。
でもボクにできることって一体なんだろうか。
それこそ……。
「マナの実の在処が分かればなあ……」
何気なしに口にした言葉。
次の瞬間、足元がとてつもない輝きを放つ。
「え、なになに!?」
そういえばボクの足元には魔法陣が出っぱなしだった。
魔法陣からは一本の太い線が上空に伸びていき、西側に飛んで行く。
それを呆然と見ていたボクは、目を見開いたまま2人に目をやった。
驚いて固まった様子のディナと、いつの間にか白いローブ姿に変身して戦闘態勢に入っている芹の姿が。
再起動を果たしたディナがボクに近付いてくる。
「明日葉、一体何をしたんだイ……!?」
「え、いや、ただマナの実の場所が分かればいいなって呟いただけなんだけど……」
「ひょっとして、さっきみたいに明日葉ちゃんの魔法が発動したんじゃ……」
「そうカ……！　ならあの線の行き先は……」
芹とディナが同時に頷いた。
もしかして、あの光の線の先にマナの実がある……？
「マナの実同士で共鳴したのカ！　こうしちゃいられなイ。すぐに飛んで行ってみよう」
「そうだね！　あそこにマナの実があるのならすごく簡単に見つかることになるよ！　すごいよ明日葉ちゃん！」

「そ、そうかな……？　ボク何もしてない気がするけど……」
芹に気圧されて思わず否定してしまったが、彼女は首を振った。
「ううん、今までは地道に探すしかなかったのに、これならマナの実集めが一気に楽になるかも！」
「探す手間が省けるから効率が何十倍にも膨れ上がるヨ。これは大手柄ダ！」
「すごいすごい」ともてはやされて、なんだかすごい恥ずかしい気持ちになってしまった。
これ以上は顔が真っ赤になりそうなので、光の線の先っぽを見に行くよう促す。
「ほ、ほら、もういいからマナの実を探しにいこうよ。線も消えちゃうかもしれないでしょ……?!」
「確かに！　じゃあ明日葉ちゃんちょっと失礼するね」
「え……うわっ！」
間近まで近付いてきた芹にヒョイと抱えられてしまった。
しかもお姫様だっこで。
「あの、芹？　恥ずかしいんだけど……」
「誰も見てないから平気平気。それにこの持ち方が一番楽だから」
おんぶの方が良いんだけど、いつ探知魔法が消えるか分からないからこれ以上無駄話をしてる暇はないだろうし、仕方なく芹の首元に手を回す。
彼女の口から「んへへ」と漏れた気がするけど、今は気のせいということにしておこう。
「それじゃあ行くよ」
「うん」
芹の言葉と共にボクの体は上空に舞い上がった。

□

芹に抱かれながら飛んで数分後、光の線の先っぽが見えてきた。
目的地がすぐそこまで来ているということなのだろう。

一応危険があるかもしれないということで、その手前で降り立つ。
探知魔法が未だに消えることはなく、目の前の大きな屋敷の中に伸びていた。
「じゃあ明日葉ちゃんはここで待ってて」
「分かった。気を付けてね」
「うん！　大丈夫だよ」
扉を開けて芹とディナは入っていく。
一応塀の陰に隠れて待っていると、すぐに芹達が敷地内から浮かび上がってくるのが見えた。
芹は黄金の果実を手に持っている。
本当にマナの実の在処を指し示していたんだ。
これならボクも芹達の役に立てる。
そう思って駆け寄ろうとした瞬間――ボクの真上を猛スピードで何かが通過していった。
何事かと思って見上げたら、煙を纏った物体が芹達の目の前で止まる。
煙が晴れると中から女性が現れた。
夕日に反射してきらめくブロンズヘアーが印象的である。
それに恰好は青を基調とした鎧を纏っており、お腹から背中をさらけ出していた。
いわゆるビキニアーマーというやつだろうか。
芹と対峙しているその少女が口を開く。
「やあ、久しぶりだねアロン。元気にしてたかい？」
「……クラウさん」
「堅苦しいね。気軽にクラウとでも呼んでくれよ」
芹と、彼女からクラウと呼ばれた人物はどうやら顔見知りらしい。
こちらからは顔を視認できないが、どうにも穏やかな雰囲気でないことは察せられた。
芹は相手の言葉を無視して質問する。
「何をしに来たの？　もう貴方が幽界に来る用事はないと思うんだけど」

「いやいや、最近魔物が活発化してるだろ？　『天界』にも被害が及んだらいけないから間引きしにきたのさ。――というのは建前で、今君が持っているマナの実をいただきに来たんだ」
「え!?　一体何が目的なの!?」
「それを集めれば願いが叶うと聞いて、すごく魅力的な話だと思ってね。今日も探索していたら、なにやら紫色の光が私の前を横切って行ったんだ。その光に沿って飛んでみれば君達がいたっていう寸法さ」
　ボクの魔法がどうやら彼女を呼び寄せてしまったらしい。
　なんだか一触即発の空気が流れてるし、とんでもないことになってしまった。
「そんな身勝手な理由でマナの実は渡せないよ！　わたし達は忙しいんだから今日は帰って」
「冷たいね。でもそういう訳にもいかないさ」
「何で？」
　クラウという少女の手に長身の槍が現れた。
「バベルが言ってたよ。ひょっとすると妖精達は何か悪い企みをしていて、マナの実をわざと現界と幽界に落としたんじゃないかって」
「何だそれハ。そんなホラ話を信じたのカ？」
「私の相棒だし。おかしいかな？」
　ディナの言葉に、相手は肩をすくめる。
「そんな突拍子もないことを信じるのは十分おかしいヨ」
「ふふっ。マナの実に何かあれば私達の命が危ない。全部私達が保有させてもらおう」
「何を勝手なことを……！」
「問答無用！」
　女性は槍を手の中でクルクル回すと、左肩を前に突き出して芹に向かって突撃する。
　危ない、と思ったけれど、芹は高速の突きをシールドを張って間一髪防御していた。
「くっ！」

「やるね。命までは取らないから安心して気絶してるといい」
「お断り……だよ！」
芹はシールドに圧力を掛けて衝撃波を放つ。前にスライムを吹き飛ばした時と同じだ。
しかし、相手は槍を鉄棒に見立てて、クルリと逆上がりの要領で回避してしまった。衝撃波はそのまま少女の真下を通り過ぎ、後方の家がバラバラに倒壊する。
少女はそのまま宙で体を捻って、槍を芹に向かって突き下ろした。
今度は芹が後方に下がることで攻撃を避ける。
「妖精が悪い企みをしてるって……一体何のこと!?」
芹は反撃として白い光弾をばらまくが、少女には全て回避されてしまった。
「だって、妖精圏に他の世界は干渉できない。それなら妖精の誰かが今回の事件を引き起こしたと考えるのが普通じゃないか？　もし妖精圏に果実を戻してもまた同じことが起こるだろう」
少女が呪文を唱えると、氷の塊のようなものが周りに現れ、芹に向かって一斉に射出する。
「くっ……。犯人ならマナの実を全部集めれて願いを叶えればすぐに分かるよ！　わたし達が争う必要なんてない！」
「それは妖精側の言い分だろ？　嘘をついて別のことに願いを使うんじゃないのかい？」
「そっちだって、『2年前』のことがあるんだから信用できないよ！」
「そう思うんだったらそれで良いさ。結局戦うことには変わりない」
芹の杖の先端が白く光ると同時に、少女の槍も青色に光った。
両者が同時に魔法を叫ぶ。
「『ホーリーレーザー』！」
「『ブリザードランス』！」
芹の杖からは膨大な光熱が放たれ、少女の方も負けないくらいの威力の凍った槍を突き出す。
その衝撃で辺り一面に暴風が吹き乱れる。
その範囲内にはもちろんボクをいる訳で……。

「うわっ!!」
あやうく飛ばされそうになったけど、咄嗟にしゃがむことで何とかこらえる。
でもつい声を出してしまった。
ヤバイと思ったがもう遅い。
塀の陰からチラリと2人の様子を見ると、芹の相手がこっちを振り向いている。完全に気付かれてしまった。
「どうやらもう1人いるようじゃないか。いつの間に味方を増やしてたのかな？」
「彼女は違うの！　ただの協力者で……！」
「ふうん？　じゃあマナの実の在処が分かったのはその子のおかげってこと？」
そう言う少女の姿が消える。
すると、ボクの後方の気温が一気に冷えたのを感じた。
背中から声がする。
「――まずはこの子を無力化すれば、アロンの戦力が下がるってことだろ？」
「やめてー！」
芹の悲痛な叫びで反射的に振り返ると、凛とした蒼い瞳と目線がぶつかった。
そしてその手前にある槍が、まるでスローモーションになってしまったかのようにゆっくりこちらに振り下ろされていく。
（あ、これ死んだ）
もう逃げることも防ぐこともできない。
ボクにできるのはただその結末を受け入れることだけ。
諦めかけていたその時、槍の穂先がボクの額の直前で止まった。
「……え？」
槍の奥にある顔を上目に覗くと、少女はこれ以上ないくらい驚いている表情だった。
ボクは動こうにも動けなかったので、とりあえず声だけ掛けてみる。

「あの……？」
「え!?　あ、ああ」
　先ほどまで堂々とした振る舞いが印象的だった少女が、動揺してるのが目に見えて分かる。
　彼女はコホンと咳払いすると、槍を下ろしてこちらににこやかな笑顔を浮かべた。
「……まあ、そうだな。どうやら君は戦闘要員ではないようだし、あまり手荒いことをするのも良くないな。うん」
「さっきと言ってること違うくない!?」
　なんか始末するとか聞こえた気がしたんだけど。
　少女は答える前に飛び引いてしまった。その直後に光弾がボクの目の前に降り注ぐ。
「彼女から離れて！」
「芹……！」
　後ろから芹に抱きしめられると、後方に逃がされる。
　それから彼女はボクを守るように前に立った。
　芹の肩から覗き込むように向こうの少女を見やると、なぜかこちらと目が合う。
　その瞳は様々な感情が入り混じってるように感じた。
　やがて苦虫を潰したような表情に変わり、目を閉じる。
「……ふっ。どうやらあまり状況が良くないようだね。ここは引いた方が良さそうだ」
「あ、待って！」
　芹が少女を追撃しようと試みるが、雪の結晶のような盾に阻まれてあっという間に見えなくなってしまった。
　少女が完全に視界から消えたのを見計らって、芹が振り向く。
「明日葉ちゃん怪我ない!?」
　彼女はボクのおでこや肩に触れて色々確かめていた。
「うん、大丈夫だよ、芹」
　芹に触れられていると、生きている実感がする。
　さっきまでの緊張がようやく解けたかのようだった。

「良かったよぉ……。明日葉ちゃんに何かあったら、わたし……」
芹の方が泣きそうになってるので、逆にボクがあやすことに。
それにしても、ボクを見ていたあの少女の目。
人の機微にあまり敏感な方ではないからほとんど読み取れなかったけど、1つだけなら理解できそうだ。
「なんか、寂しそうだったな……」
「え、明日葉ちゃん何か言った？」
「ううん、何でもないよ」
何故ボクに向かってそんな感情を投げかけていたのか。
それを理解するには、まだ知らないことがあるのかもしれない。

０９：人生ままならない

差し込んできた朝日が眩しくて、ボクは自然と目を覚ました。
でも何か違和感。
まず気付いたのは部屋の匂いが違うこと。
いつも過ごしている家の香りではなく、それに天井を見やると灯りの位置が異なっていた。
（ん？　あれ？）
混乱している内に寝ている隣から声がする。
「んむう……」
声のする方を向けば、そこには触れそうな距離に芹の顔があった。
めちゃめちゃビックリしたけど、そこまで来てようやくボクが芹の家に泊まったことを思い出す。
昨日クラウと呼ばれた人物の襲撃にあって、危うく死にかけたボクは、芹に一緒にいるべきだと勧められた。
曰く、ボクはクラウに顔を見られているから襲われる可能性があるらしい。
それでボクを守る為に芹が家に泊まっていくべきだと主張したのだ。
とはいえ知り合いでもない限り顔だけでその人物の住所やら何やらが分かるとは思えない。
だからそこまで迷惑は掛けられないと反対したのだけど、芹は譲らなかった。
『明日葉ちゃんとわたしはもう一心同体なんだよ！　もし明日葉ちゃんを守れなかったら……耐えきれなくて飛び降りしちゃう！』
いつ一心同体になったのかと問い詰めたかったが、そんなツッコミができない程芹の表情が鬼気迫るものだったので、やむを得ず彼女の言い分を聞き入れることにした。
でも、昨日の出来事があったおかげで芹は随分神経を張り詰めているらしく、どこにでも彼女の顔が。
それはお風呂でも同じで、先に入らされてから芹が突撃しようとし

てきて、裸を見られるのが恥ずかしいという思いからどうにかせき止めることに成功していた。
就寝時もボクが下で寝ると言ったのだが、一緒が良いと譲らなかったので仕方なく隣で寝ることに。
２人とも小柄だったのが幸いして、窮屈ということはない。
眠るまでの間、芹がピットリとくっついてボクを抱き枕にするように抱えてきた時は「襲われる……!?」とか思ったけどそんなことはなかった。
ボクが不安かもしれないからと安心させようとしたらしい。
そこまで過保護にならなくても……と思ったけど芹からすれば「好きな人の為に尽くすのは当然！」とのこと。
（そうなんだよね。芹の好きな人はボクなんだ）
ハッキリとした好意を示されて、絶対に振り向かせると決意を固めて。決して折れない心には賞賛を送りたい。
けど、なんか改めて考えると恥ずかしくなってくるな……。
未だに夢の中の芹の顔が超至近距離にある。
「むにゃむにゃ……」
やばい。めっちゃドキドキしてきた。
好きかどうかとか関係なく、こんな可愛い顔が目の前にあったら誰だって同じ気持ちになるだろう。
顔が良いだけでなく性格も良いんだから、恋人になれるなら幸せだとは思う。
「……恋人か」
とはいえボクにとってそれは未だ未知の領域。
かなり慎重になってしまうのはしょうがないのかもしれない。
今は自分の体の危機もあってそんな気分になれないというのもある。
今答えを出すべきではないだろう。
時間的にそろそろ起きなければいけないので、芹の腕の中から脱出を試みたのだが、力が強くとてもでないが剥がせない。
声で起こすことしかないようだ。

「芹。芹起きて」
「ん、んぅ～……あすはちゃん？」
芹は手で擦りながら目を開けた。
そうすると自然と彼女の腕が外れたので、体が自由になる。
ボクが上体を持ち上げると同時に、芹もむくりと起き上がった。
しかしその眼はトロンとしており、半ば夢の中という状態である。
「……あれ～？　あすはちゃんがうちにいる～」
「芹が泊まれって言ったんでしょ」
「……」
ぼんやりとした声の彼女に答えたつもりだったのだが、そこから反応がない。
「あすはちゃん……」
芹は、何故かボクの首に手を回して顔を近付けてきた。
「せ、芹……？！」
「あすはちゃん、チューでおこしてぇ……」
徐々に近付いてくる芹の顔。
この時ボクは、彼女が完全に寝ぼけていることを悟った。
「ちょちょちょ！　起きて芹！　とりあえず離し……って首を引っ張るんじゃない！　あ、こらっ胸を揉むな……！　誰か助けてーー！」
金曜日の朝、初霜家にボクの声が響き渡る。
芹のお母さんお父さん、本当にすみません。

□

ボクのアイアンクローで芹とのキスを回避した後、若干気まずい雰囲気になりながら学校へと向かい、今はまた芹の家に集まっていた。
ここにはちゃんとディナもいる。
今更になって聞いたけど、普段ディナは勝手に居候してるのがバレるのを防ぐため、透明化して過ごしているらしい。
見えてないのならいないのと一緒ということだろう。
あと食事を取る必要はなく、マナを体に吸収することで生きながら

えてるんだとか。
何ともエコな生き物だ。
「さて、どこから話そうカ」
3人で円になって座ると、ディナが最初に切り出した。
「まずは昨日現れた人物についてかナ。……最初に説明しとくべきだったんだろうが、これについては完全にワタシ達の不手際ダ。本当にすまない」
「うん。おかげで明日葉ちゃんを危険な目に会わせちゃったね……」
芹とディナが頭を下げてくる。
いきなり謝罪から入られるとボクとしてもやりにくいし話も進まない。
「いやいや！　結果的に命は助かった訳だし本当に気にしないで！あの人が誰だったのか気になるし、教えてよ」
「……そうだネ。まず彼女の名前からいこうカ。彼女はクラウと呼ばれていル。ワタシ達と対立している『天使』の仲間なんダ」
「天使？　妖精とは違うの？」
ボクはただ疑問を口にしただけだったけれど、芹が慌て出した。
「あ、明日葉ちゃん、ディナのことを天使と一緒くたにしちゃ駄目だよ！」
「いや気にしないでくれ芹。明日葉からすれば分からないのは当然ダ」
どうやらあまり良好な関係ではないらしい。
今後は気を付けねば。
「天使とは天界に住む生物の総称で、ワタシ達妖精とはそれはもう仲が悪い」
いきなり重たい話ぶっこんできたなあ。
「なんで仲が悪いの？」
「うーん、話せば長くなるから簡潔に纏めるけど、人間がまだ生まれてくる前に妖精と天使と巨人という3種族が存在していたんダ」
「なんか、神話みたいな話だね……」
今目の前に妖精のディナがいるから信じられるけど、少し前だった

らおとぎ話としてしか思わなかっただろう。
　ディナはコクリと頷く。
「神話というのは昔の人々が我々を題材にして作ったのかもネ。それはいいとして、決して友好的ではなかったとはいえ、ある問題が発生してからは戦争が起こるくらい種族間で亀裂が生まれてしまったんだヨ」
「戦争!?」
　何が起きたんだろう。原因が気になるがひとまず口を挟まないでおく。
「大地は割れ、森は焼かれ、ひどいものだっタ。このままでは現界が崩壊し、どの種族も全滅するというとこまで来てね、それぞれ別の世界を作ることにしたんダ」
「それが妖精圏とかってこと?」
「そうサ。その中で3種族は『現界に必要以上の干渉をしない』という条約を締結しタ。現界が滅びれば我々の世界も芋づる式に消えてしまうからネ。また現界がめちゃくちゃになったら大変だろう?」
「うん、まあ……」
「そういうことで我々は現界から姿を消したまま、自分達の生活を謳歌していたんだが、2年前に問題が起きタ」
　2年前と言えば芹が魔法使いになった時じゃなかっただろうか。
　ということは3種族の間に何か起きたってこと?
「天使達が住む天界から神器と言われるモノが盗まれてね、犯人を慌てて追ってきたのが始まりサ」
「と言うと?」
「今言った通り、我々は現界には必要以上に干渉できなイ。それを破れば他の2種族から追及されるからネ。それでも天使達はそれを無視して現界に降りてしまったからワタシ達や巨人も無視はできなくなっタ。それだと『必要以上の干渉』になってしまうからどうしたかと言うと……人間に頼むしかなかったんダ」
「その人間って言うのが……」
　芹の方を向けば、彼女が頷く。

「そう、わたしだよ。世界の危機になるかもしれないから協力してってディナに頼まれたの。それからわたしとクラウさんともう1人が魔法使いになったんだよ」
「なにそれ。自分達の代わりに芹達を争わせたの？」
　代理戦争のようなものじゃん。
　自分たちは安全なところから見てるだけで、芹だけが頑張っているのなら流石に見過ごせない。
「今となってはそう言われたとしても仕方ないネ……。ワタシとしては芹を他の魔法使いと敵対させる気はなかっタ。神器が見つかり、事件が解決するまでは他の2種族と休戦することも考えてたんが……結局また対立することになってしまったヨ」
「そこはもうちょっと頑張らなきゃ駄目じゃん！　芹だって好きで戦ってる訳じゃないでしょ？」
「そうだね……。でもわたしもアロンさんに騙されたから戦わざるを得ないっていうか……」
「騙された？」
「そうなの。最初は共闘しよって話し合ったのに、次に会った時には槍を向けられて『やっぱり君達は信用できない』なんて言われて襲われたし……」
　つまり奇襲されたってこと？　なにそれひどい。
「確かに昨日もめちゃくちゃ好戦的だったけど……」
　危うくボクも殺されかけたし。
「天使の考えに賛同して妖精と巨人の末裔を追い払おうと考えてるのかもしれない。積極的にこちらと戦おうとするから危険で交渉もできないんダ」
「だから敵対してるってことなんだね」
　昨日の光景を思い出す。
　突然襲撃してきて、芹達の言葉も聞かずに交戦に入るし、危ない人というのは納得できた。
　でも、ボクの顔を見て槍を止めたんだよなあ。
（あの表情はなんだったんだろう……）

その後の態度の変わりようもおかしかった。まるで親しい人だった時のような気まずさを感じていたのかのよう。
もしかして、クラウって人は本当にボクの知り合いなのだろうか。
……いや、ないか。
滅多にいないらしい魔法使いが2人も顔見知りだなんて、宝くじに当たるよりも可能性は低いだろう。
今はディナの話に耳を傾けることにする。
「2年前の事件が終わってから我々は一旦それぞれの世界に帰ったんだけど、マナの実が落ちて現界に戻ったら、まさか天使まで降りてきてるとは思いもよらなかっタ。今後は彼女達の妨害も入ってくるだろうし、一体何が目的なのやラ……」
「マナの実を集めて願いを叶えようとしてるのかな？」
「その可能性は大いにあるネ。犯人を見つけずとも天界に持っていけば関係ないと思ってるのかもしれない」
「そんなことして何かメリットってあるの？」
ディナは芹の言葉に頷いた。
「マナの実を集め切ればその場所には樹木が生まれル。そうすると樹はその土地に根付くんだけど、マナの供給を自由に設定できるようになってしまうんダ。天界だけ供給量を多めにして、他の世界には少な目に、なんてことも出来てしまう」
「え、そんな！」
マナが無ければ生物は生きていけないって言ってたし、もしマナの供給が絶たれれば妖精達も含めた全ての生物が絶滅してしまうだろう。
「大変なことじゃん！」
「そう。天使達がそこまで考えてるのかは別として、妖精圏以外にマナの実が渡るのは不味い。これからはより一層力を入れて回収にあたらなければならなイ。そこで明日葉の探知魔法が大いに役立つんダ」
マナの実の回収にこれほど便利な能力もないだろう。
ボクが『サーチ』を使えば一瞬で目的の元に辿り着けるのだから。

「早速マナの実を探しにいく？」
「そうだネ。できることなら現界のモノから回収していきたイ。人間が魔法を認識できなくなる結界を張るからちょっと待ってくレ」
そんなこともできるのか。
ディナが呪文を呟くと半球状の膜のようなものが体から出てきた。膜はボク達をすり抜けながらどんどん大きくなっていく。
外を見れば遥か遠くまで広がっているのが見えた。
「ふう。これで現界で魔法を使っても大丈夫サ。明日葉には早速『サーチ』の魔法を使ってもらいたイ」
「分かった。えっと……サーチ！」
部屋の中で立ちあがって魔法名を叫ぶ。
……が、ボクの足元には何も生まれなかった。
「……あれ？」
「「え？」」
何か駄目だったのかと思い、もう一度「サーチ」と叫んだ。
しかしやっぱり何も起こらない。
「え、あれ？　昨日はこれで良かったじゃん！　現界だと魔法が使えないってこと……？」
「いや、そんは筈はないんだか……ちょっと魔力を確認させてもらうヨ」
ディナはボクの胸元で手をかざして魔法陣を作る。
しばらくしてから「なるほど」といった具合に頷いた。
「魔力量が著しく減っていル。昨日探知魔法を使ったことが原因かもしれないネ」
「でもわたしは1日経てば魔力戻るよ？」
「芹は魔法使いだからそれができるんダ。明日葉の場合は自分で魔力をコントロールできてる訳じゃなイ。普通の魔法使いは大気中のマナを自分の体内の貯蔵庫に溜めておけるんだけど、それができないからマナの実が現在保有してるマナの総量によって魔法が使えるかどうか変わってくるんじゃないかナ」
「えぇー……。じゃあしばらく魔法は使えないってこと？」

「そうなるネ。明日葉がマナの実を吸収してたのが5日前で、昨日魔法を使えたってことは……チャージまでおおよそ4日掛かるってことなんだろう」
「そっかぁ……」
便利な能力だとは思ったけど、何事も思い通りにはいかないものだ。
こうなれば3日待つしかない。
「じゃあ今日はもう解散する？」
「ワタシと芹は明日から休みだから探知魔法で探すことにするけど、明日葉は家に帰るのかイ？」
「まあ、流石にこのまま芹の家に泊まり続ける訳にもいかないでしょ」
ボクの言葉に芹が大声を上げる。
「えぇー！　明日葉ちゃんが良いなら何日居ても大丈夫なのに！」
「それは流石に芹のご両親に迷惑が掛かるでしょ……。ディナからもらった結晶もあるし、何かあったら助けてもらえたらなって」
「うぅ～でもでも～。何かあってからじゃ遅いかもしれないし……」
芹が未だに抗議の声を上げている。
確かにあのアロンって人に追っかけられれば、ひとたまりもないだろう。
でも幽界に引きずりこむにはその人に接触しなきゃいけないみたいだし、知らない人に接近を許すことはしないから大丈夫だと思う。
「心配ないって。要は人と接触しなきゃ良いんでしょ？　それに、芹なら必ず間に合うって信じてるからさ」
すごい他人任せなこと言ってるがこの際はしょうがない。だって自分の命が掛かってるし！
平気だよってことを伝える為に笑顔で芹を見たのだが、彼女は頬を赤らめている。
「そ、そっか……！　うん、明日葉ちゃんの為ならどこからでも駆け付けるよ！　だから明日葉ちゃんも無理しないでね」
「分かった。あまり1人で出歩かないようにするよ」
芹の承諾ももらったので今日のところは帰ることにした。またボ

クの魔力が溜まったら手伝うことを約束して。

すっかり日が長くなってきた春の終わりは、夕方になっても暖かい。

心地よい風を体に受けながら歩いて数分もすれば岸波家が見えてくる。

一先ずこれで襲われることもないから安心。

そう思っていたのだけど、ボクの家の玄関の前で立っている女性を見つけた。。

まず印象的なのは、遠目からでもわかるほど輝いている長い金髪。

近付けば分かるが、手入れがしっかりとなされていることを証明するように、鏡のような光沢を持ち、枝毛などどこにも見当たらない。

サラリと後ろ髪を払う姿が様になっているその女性の顔も、完璧なバランスでパーツが配置されている。

芸能人であったのなら、テレビで見ない日はないくらい引っ張りだこだろう。

でも彼女はテレビに出るのはあまり好きではないらしい。

なんでそんなこと知ってるのかって？

それはボクが彼女と友達だからだ。

コンクリートで舗装された道を歩いているボクの足音に女性は気が付いたようで、こちらを振り向いた。。

その人物がボクだと分かった途端、彼女は太陽のような笑みを浮かべる。

「やあ、明日葉。随分長いこと会ってない気がして寂しかったよ」

「いやいや、楓（かえで）とは2週間前に会ったでしょ……」

「私にとっては永遠に近い時間だったのさ」

彼女は会話をしながらボクの頬に触れた。

「ちょ、ちょっと……！」

「ああすまない。明日葉を前にしたらつい」

そう言って彼女は笑う。

その仕草も似合ってるんだから美人ってズルいよなあ。

彼女の名前は天城(あまぎかえで)楓。
金髪碧眼のクォーターであり、恵まれた容姿と優れた素質を持つという、神から二物を与えられた存在だ。
何がすごいってその美貌を活かしてプロのモデルをやっているということ。
聞いた話だと小学生の頃から芸能人として活躍していたらしく、今では雑誌に頻繁に取り上げられている程の人気を誇っている。
なんでこんな凄い人と友達でいるかと言うと、中学1年生の時のちょっとしたことがきっかけであった。
芹が用事で一緒に帰れず、たまには別の道から帰ろうかと思ったら、その道には神社に続く階段があり、そこに目立つ容姿の楓が登っていくのが見えたのだ。
神社の娘さんなのかな？　それにしては金髪って珍しいな、などと思いこっそり後をつけてみた。
すると、神社の端っこでは子犬にミルクを与えている彼女の姿が。
楓に声を掛けたら最初は警戒されたけれど徐々に仲良くなって、モデルで悩んでることを聞かされたり、その相談に乗ったことで今となってはだいぶ親しくなった、と思う。
……なんかたまに距離感おかしい時があるけど。
「でも急にどうしたの？　うちに上がってく？」
立ち話もなんなので家に入るよう促したのけど、楓は首を横に振った。
「……いや、今日のところは明日葉の顔を見に来ただけだよ。ただ明日とか時間があるか確認したくてね」
「明日？」
今日は金曜日。
日曜日は芹とスイーツを食べに行く約束をしてるので、明日なら空いてる。
「大丈夫だよ。どこか行ったりするの？」
「明日葉に見せたいものがあって、私の家に来てほしいんだ」
「家に？　それだけのことだったら電話でもすれば良いのに……。わ

ざわざ遠くから来なくても」
楓とは学校は別々だし、家もここからずっと離れてる。
会おうと思うと結構な気力がいる筈なのだが。
「電話だと明日葉の顔が見られないだろう？　タクシーなんか使えば良いんだからこんなの遠い内に入らないよ」
ただボクの顔を見る為だけにタクシーを使うとか……。
お金持ちだからか、ちょっとボクみたいな一般人とは感覚がずれているところあるんだよなあ……。
「さて、目的も果たせたことだし私は帰るよ。明日の午後からでも良いからよろしく」
「う、うん。電車でそっちに行くよ」
「ありがとう。明日葉も元気そうだし、やっぱり来た甲斐あったな」
「？　まあ元気だけが取り柄みたいなとこあるし？」
発言の意図がいまいち読み取れなかったが、ボクの返事に対して楓は少し悲し気な表情になった。
「……そうか。それ以外にも魅力はあるがそれはまた今度話すことにしよう。また明日ね」
「うん、バイバイ」
そう言って楓は去っていった。
なんだろう。
去り際に何か言っていたような気がするんだけど。
「気のせいかな」
まあハッキリとした声で話してないのならきっと重要なことではないのだろう。
しかし結局明日も出かけることになってしまった。
芹達からは外出を避けるように言われたが、人通りの多いところを進めば大丈夫だろう。
楓の家も何度か行ったことあるし、気心が知れた仲なのだから問題ない。
こうして会うことも少ないのだからたまには良いかなと思ってしまった。

不安なことがあれば芹に連絡することにしよう。
この時の判断を後に後悔することになるとは知らずに。

１０：罠か、それとも

楓の家に向かうべく、ボクは電車に乗っていた。
降りた場所はボク達が住んでいる住宅街とは違い、大きなビルが立ち並んでいる。
そのメインストリートを抜け、並木通りを数分程歩いていると、周りの建物よりひと際大きいマンションが見えてきた
「うーん、相変わらずすごい……」
自分の語彙力の無さが恨めしい。
ここが楓の家だ。あまりの馬鹿でかさに圧倒されるばかりであるが、立ち尽くして周囲の人に笑われるのも嫌なので入り口へ向かう。
にしてもこんな豪華な建物の部屋はどれだけお金が掛かるのだろうか。きっと一年間だけでボクの家のローンよりも払っているに違いない。
恐る恐るといった感じで人の倍はある高さの自動ドアを抜け、正面のエレベーターへ入っていく。
長い長い時間を掛けて２０階まで登って行ったら、これまたしばらく歩いて彼女の部屋の前までたどり着いた。
インターホンを鳴らすとすぐに楓が出迎えてくれた。
「やあ、よく来てくれたね」
「おじゃまします。いつも思うけどこんなマンションに住んでるなんて羨ましいよね」
「ははっ、来たいならいつでも来てくれて構わないんだよ？」
「いやあ、電車使わなきゃいけないしなかなかね」
楓は「そうか」と言って考える素振りを見せた。
「ならこの部屋に住むというのはどうだろうか？　それならいつでもマンションの快適さを体感できるよ」
「そんなことできないでしょう。楓も冗談言うんだね」
「あながち冗談でもないんだが……まあいい。さっそんなところに立ってないで上がってくれ」
「はーい」

前半何か言ってた気がするけど、あんまり気にしないことにした。
ピカピカの廊下を過ぎ、楓に連れられるままリビングへと通される。
部屋の中は、ここがマンションの一室であるとは考えられないほどの広さを誇っていた。
「そこに座っててくれ。すぐ用意できるから」
若干いたたまれなさを覚えながら大きなソファへと座る。
目の前のテーブルに紅茶が出された
「お菓子なんかもあるから遠慮せずに食べてくれ」
「いやいや、そこまでしてもらわなくても平気だよ」
「私がもてなしたいんだ。何も気にする必要はないよ」
「じゃ、じゃあ……」
ここまで言われたら断る訳にもいかないので、楓がキッチンから持ってきたクッキーに手をつけてみた。
「ん、美味しい！」
「本当かい？　何回か試してみて納得いくものができたと思ったけど、明日葉の口に合ったようで何よりだ」
「え、これ楓が作ったの!?」
もう一枚手に取って全体を眺めてみる。
そこらへんの市販のものより綺麗だし、高級お菓子と言われても全く分からないだろう。
「料理までできるなんてすごいよ……」
「今年から1人暮らしをしているからね。自分でできることはなるべく自分でやるようにしてるんだ」
「ふえぇ……。楓に比べたらボクはミジンコみたいだね……」
学校もあって、モデルの仕事もして、それはもうボクでは想像できないくらい忙しい生活を送ってる筈なのに……。
そんなことを微塵も感じさせない態度で過ごしているんだから超人と言う他ない。
ボクが驚いている正面で楓は優しく微笑んでいる。
「ふふっ、明日葉は謙遜が過ぎるな。確かに明日葉にできないことが

私にはできるのかもしれないが、逆もまた然りだ。それで気付かされたこともある」
そう言って楓は紅茶に口をつけた。
一つ一つの動作が優雅で、まるでおとぎ話のお嬢様のよう。
「ボクにできて楓にできないことなんてあるの……？」
「たくさんあるさ。そうだな……私達が会った時のことを覚えてるかい？」
「そりゃあまあ」
神社で楓を見かけた時は衝撃だった。
子供とは思えない程綺麗だったし、何より大人びていた。
でも彼女の顔には常に暗い影が落ちていて、出会ってから数日したある日相談を受けることとなった。
「当時は自分だけが苦しい思いをしているんだと本気で信じて、周りを見やることもしなかった。でもそれを変えてくれたのが明日葉だったんだ」
一拍置いて楓は続ける。
「あの時、明日葉と会えて良かったと思っている。明日葉のおかげで私は変われた。明日葉に出会えたことが私の人生の転機であり、全てと言っても過言じゃない」
「そ、それは大げさだって……。楓はなんでも出来るし、ボクがいなくても……」
「そんなことない！」
楓は身を乗り出してボクに顔を近付けた。
驚いて固まっていると、彼女はハッと我に返ったようで、少し顔を背ける。
「……すまない。でも今言ったことは本心だ。私にとって当時の明日葉の言葉はそれほどに衝撃的だった」
楓が悩んでいたのは、親も愛してくれないし、周りはモデルだからと自分を遠ざけているんだということ。
モデルをしている子供の生活なんてその時は想像もできなかったけど、孤独が辛いというのは痛い程理解できた。

まるでゴールのない暗闇の迷路のように、永遠と苦しい時間が続くのだ。
それを考えた時、ボクは楓をギュッと抱きしめて頭を撫でていた。
何を言ったかまでは覚えてないけど、とにかくそれが楓の心に刺さったらしい。
「私は誓ったんだ。明日葉にもらった愛の分だけ明日葉に返そうと」
「あ、愛って……」
急にそんな言葉使われるとドギマギしてしまうんだけど……。芹じゃないんだから
楓は照れる様子もなく、ただ真剣にこちらを見ている。
「私にとって君はそれだけ大切な存在であると伝えたかったんだ。……でも私は過ちを冒してしまったよ」
「か、楓……？　過ちって？」
私の質問には答えず、楓はふらりと立ち上がった。
そのまま私の横へと立つ。
彼女はとても高身長だから、傍に立たれると威圧感がすごい。
……ただ、なんかそれだけじゃないような気がする。
嫌な予感がするっていうか、何か寒気に似た感覚がボクにまとわりついてくるような、そんな感じ。
「一昨日の夕方、君はどこにいた？」
「えっ」
ギクリと体が強張る。
その時間はちょうど芹達と一緒に魔法の練習をしていた。
そしてマナの実の在処を突き止めて……。
「私はね、ここから東にある住宅街の有名な豪邸にいたよ」
「そ、それって……」
ああ、駄目だ。これ以上はいけない。
ボクの思考が停止を要請するが、もう遅い。
楓はゆっくりとしゃがんでボクと目を合わせた。
瞳は大空よりも青く、透き通っている。
「その反応、やっぱり明日葉も同じところにいたんだね。私の見間違

いではなかった」
楓の体が光る。
その眩しさに思わず目を背けると、次の瞬間には光は収まっていた。
青い鎧に金色の胸当て、白いマント。
その姿をボクは2日前に見ている。
クラウと呼ばれた人物が、そこにはいた。
「あわ、あわわわ……」
楓が魔法使い？
ビックリし過ぎて震えた声が出てくる。
どうしよう。逃げようにも今はソファに座っていてすぐには動けない。
仮に逃げたとしても、一瞬で周りこまれてしまうだろう。
絶対絶命の危機が突然やってきて、全く対処方法が思いつかない。
そうこうしてる内に彼女の手がボクに近付いてくる。
もう駄目だと思った瞬間――楓は頭を下げながらボクの肩を掴んだ。
「ほんっっっとうにすまなかった！」
「……え？」
「まさか明日葉が幽界にいるとは露知らず、君を怖がらせてしまった！　アロンの仲間だと思って気絶させようとしただけなんだ！」
「え、いや、あの……」
「明日葉からすればただの言い訳をしているだけと思うかもしれないが、本当に傷つける気はなかったんだ。それだけは分かってほしい。ただ、明日葉に危害を加えようとしたのには変わらないのだけど……」
楓は頭を下げ状態のまま動かない。
どうやらボクの言葉を待っているらしい……？
混乱で頭が上手く動いてないけど、とりあえず何か言わなきゃ。
「え、えっと、頭を上げてくれない？」
「……許してくれるのか？」

「許すっていうか、何がなんだか分からない状態だし……」
楓がアロンって人と同一人物で、それが分かった途端いきなり謝られて……。
ボクの中で情報が渋滞してしまっている。
楓は一旦ボクから離れた。
「む、明日葉からすればあまりにも急すぎたか。すまない、私は本当駄目だな……」
「いや謝られても、その、困るよ。ボクは気にしてないって言うか、確かに怖かったけど……」
「そう、だろうね……。私にとっては死に値する行いだったが、それだと明日葉が困るだろうし自分の胸の中にしまっておくよ」
「それはボクに言う前に胸にしまっておいてほしかったなあ……」
一旦状況を整理しよう。
「えっと、楓は魔法使いなんだよね？」
「そうだよ。2年前に魔法使いとなって、君と一緒にいたアロンと戦っていたんだ」
「せ……じゃなくてアロンとディナも同じこと言ってたね。妖精と天使は仲が悪いから争うことになったんだって」
芹の名前を出しそうになったけど、何となく口に出すのは憚られた。
芹も楓もお互いを本名で呼んでないし、何か意味があるのだろう。
「アロン達から色々聞いたようだね。確かにそれもある。それ以外にも色々あったんだけど、あまり明日葉に話す内容でもないかな」
「そ、そうなんだ……」
「もちろん明日葉が聞きたいことなら何でも話すつもりさ。一昨日の罪滅ぼしではないが、これでも君に対しては真摯なつもりだ」
楓は変身を解き、立ち上がると紅茶のおかわりを持ってくると言ってキッチンに入っていった。
しばらくしてから戻ってくると、再びボクの正面のソファに座る。
ティーポットから注がれた紅茶に口をつけたボクは、1つだけ気になることを彼女に聞いてみた。

「えっと、楓はボクに魔法使いだって打ち明けてくれたけど、別にそんなことする必要なかったんじゃないかな？　そうしたら謝る必要もなかったのに……」
「それはできない」
楓は間を置かずに答える。
その言葉の端からはハッキリとした信念を感じた。
「え、どうして？」
「私は明日葉に嘘をつかないと決めているからね。明日葉は私にとって唯一信じられる人間だ。君だけが本当の私を見てくれた。それなのに、もし嘘をついてしまったら、私は一生後ろめたさを感じて生きていくことになる。明日葉とは横に並んで生きていきたいのさ」
楓はティーカップを持ち上げる
楓の中でボクはどんな聖人君子になっているのだろう……。
ボクはあくまでも普通の人間だ。
ちょっと前世の記憶を持ってたり、何故か魔法の事件に巻き込まれてるけど、自発的に何かを解決したことなんてない。
そのことを伝えようと思ったのだが、楓は「待った」と言ってボクの唇に人差し指を当てた。
「明日葉の言わんとしていることは分かる。ただ、私は特別でなければならなかった。誰からも羨ましがられ、対等に接してくれる人間なんていなかったんだよ。それなのに君だけは違った。私にとっての初めての友達になってくれた。それがどれだけ救いになったことか……。だから、その思い出だけは私から奪わないでくれ」
楓の蒼く澄んだ瞳がボクにまっすぐ突き刺さる。
目を逸らそうとも彼女の視線が外れることはないだろう。
「うん……分かった。でも思い出にしなくても相談があれば何でも言ってね。ボク達は『友達』なんだから」
「……そうだな。これで隠し事はなくなったし、私にとっても気が楽になったよ」
そう言って楓は微笑んだ。
ボクへの後ろめたさのようなものがなくなったからなのかもしれ

ない。
　それを見てボクもちょっと安心する。
「それで、楓は謝る為にボクを呼んだんだろうけど、マナの実のことはこれからどうするの？」
「このまま世界に危機が迫ってるのなら見過ごす訳にはいかないよ」
「ならボク達に協力してくれるってことだよね」
　芹も楓も、ボクはその人となりをよーく知っている。
　ボクが中間に立てば争いも起きないのではないだろうか？
　それなら誰にもマナの実集めを邪魔されることも無くなるだろうし一件落着だ。
　……と、思っていたのに、ボクの言葉を聞いて楓は目の色を変えた。
「ボク『達』というのは、アロンのことを言ってるのかな？」
「え、う、うん。」
　楓は「ふむ」と顎に手を当てた。
　どうかしたのだろうか。
「残念ながらアロン達に協力はできないよ。私達には私達のやり方があるからね」
「なんで!?」
　ボク何かしちゃった……？
「ああいや、明日葉が悪い訳じゃない。私とアロンが争い合ってるのは知っているだろう？」
「そうだね……。一昨日もすぐに戦闘始めちゃうし……」
「それについては本当にすまない。もっと周りを見るべきだった。とはいえ、一度裏切られた相手をもう一度信じるのが難しいのは分かるだろう？」
「裏切られた？」
　一瞬自分の耳を疑った。
　ディナは、裏切ったのは天使側だと言っていたのに……。
「ああ。私達は昔のことは一旦水に流して共闘しようという話し合いをしたんだ。しかしアロンとディアンシーが裏で怪しい動きを見せたから共闘自体無しになってしまったんだよ」

「そうなの!?」
ディナは真面目そうな性格だったし、怪しまれることなんてしなさそうだけど……。
もっと言えば芹自体あまり争いを好まない性格だし、駄目なことは駄目と言う筈。
おかしいと思ったけど、今は楓の言い分を聞こう。
「そうさ。全員が抜け駆けしないように行動を逐一報告し合おうと協定を結んだのに、夜な夜なアロン達が探索に乗り出していたのさ。しかもアロン達はそれをとぼけた。これではせっかくの協定も意味がない。それからは3種族それぞれで戦いながら神器を探すことになったよ……」
楓は当時を思い出したのか、ため息をついていた。
昨日は全然そんな話は出なかったのに……。
ディナと芹がボクに嘘をついたのだろうか？
まだディナとは付き合いが短いとはいえ、嘘をついてるようには見えなかったのだけど……。
分からない。
この件に関しては、ディナと芹に再度話を聞いた方が良いだろう。
「話してくれてありがとね。ちょっとアロン達からも話聞きたいし、今日はお暇させてもらってもいいかな？」
「え、何で？」
「？　何で、とは？」
楓はティーカップを置くと立ち上がった。
まばたきした瞬間、目の前の彼女が消える。
「え」
「明日葉にそんな危険なことさせる訳ないだろう？」
「うひゃあ!?」
後ろから肩に手を置かれた。
魔法を使って回り込んだのだろう。ビックリするから止めてもらいたい。
「アロンや妖精とこれ以上会うのは許可できない。きっと明日葉を騙

してるに違いないのだからね。これからは明日葉のことは私が守るよ」
「えええ！　それは困るよ！」
芹とは長い付き合いだし会わないというのは不可能だ。
なにより手伝うって約束もした。
これからはボクの魔法が重要になってくるだろうし、マナの実は元々生えていた妖精圏に返してあげたいところである。
「何が困るんだい？　妖精と契約してしまったことかな？　それならいつでも解除できるし天使の側についても問題になることはないよ」
「そういうことじゃないの！　ボクは誰とも契約を結んでないし……！」
「何？　それじゃあどうして明日葉は魔法が使えるんだ？」
「それは……」
ここまで来たら隠し事もできないだろうし、この5日間のことを全て話すことにした。
芹達に助けてもらったこと。マナの実がボクの体内にあること。
黙って聞いていた楓は「なるほど」と頷いた。
「それで明日葉は魔法に関わってしまったんだね……。マナの実を使ってマナの実の在処を探す、か。それなら今後は私達のためにその能力を使ってくれないか？　マナの実は天使の世界である天界に植えなおしておきたい」
「それって他の世界が滅びるんじゃ……」
妖精と巨人の世界が滅びるのは悲しいことだと思う。
でも楓はそれを否定した。
「そんなことはしないさ。確かに今回の件は妖精が一方的に悪いかもしれないけど、彼らの世界へのマナの供給を絶って現界に出て来たら世界は大混乱に陥るだろう。そしたらまた3種族による戦争が起きるかもしれない。それは私達の望むところではないよ」
「ちゃんと考えてるんだね……」
「それはもちろんだよ。明日葉に戦いに巻き込まれるのも嫌だしね。とはいえ明日葉が取り込んでしまった果実を何とかしないと、魔物に

狙われ続けるだろうし……」
「うん……。アロン達もそれについては考えてくれてるよ」
「そうか……。何か思惑がありそうだがそこは一旦置いていこう。私達もいち早く果実を取り出せるように方法を模索するよ。だから明日葉には私達の方を信じてほしい」
「うっ……。それは……」
結局どっちにつくかの話に戻ってしまった。
共闘は無理。だから楓は自分達の側についてほしいと言う。
それを決めるにはちょっと時間が足りない。
「……ちょっと考えさせてくれない？」
「なに？」
楓はそんな返事が来るとは微塵も思ってなかったといった様相で驚いた。
ボクとしては、正直仲良くしてほしい。
だってどっちも良い子だし、争わせたくはないのだ。
それができないとなれば、ボクはどちらかに着くしかないのだろう。
「楓の優しさも嬉しいけど、アロンにもすごくお世話になったし……。今この場で決めるのは、無理……」
「……そうか。いやそうだな。いきなり信じてくれというのも無茶なお願いだった。良い返事を期待してるよ」
楓は笑みを浮かべてはいるがちょっと悲しそうであった。
それを見ると心がキューッと縮む思いがするが、適当な返事はできない。
楓にお暇することを伝えて部屋を出る。
マンションを出る頃には心なしか冷たい風が流れていた。
「……芹か、楓か。どっちにつけば良いのぉ……」
楓は、ボクが芹に相談するのは絶対に駄目だと言う。
そりゃあ楓からすれば芹は敵なんだから、芹が頼られるのは辛いのだろう。
でもボクが芹に何も伝えないと決めるのであれば、それは芹に対す

る裏切り行為だ。
そんなことはできない。
じゃあ楓の言ったことを無視するのかと言われればそれもできない。
どっちも大事な友人だし……。
どっちかにつけばもう一方が悲しむだろう。
そんなことはさせたくない。
「これ、決めるの無理じゃない……？」
誰もいない場所で、ボクはそうつぶやいた。